佐久市埋蔵文化財調査報告書　第38集

芝宮遺跡群

MINAMISHIMONAKAHARA

南下中原遺跡Ⅱ

長野県佐久市長土呂南下中原遺跡Ⅱ発掘調査報告書

1995.3

出光興産株式会社松本支店
佐久市教育委員会

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第38集

芝宮遺跡群

MINAMI SHIMONAKAHARA

南下中原遺跡Ⅱ

長野県佐久市長土呂南下中原遺跡Ⅱ発掘調査報告書

1995.3

出光興産株式会社松本支店
佐久市教育委員会

例　　言

1　本書は、出光興産株式会社松本支店が行なう、出光興産佐久インターＳＳ新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。

2　調査委託者　　出光興産株式会社松本支店　　松本市中央２丁目１番27号
松本本町第一生命ビル４Ｆ

3　調査受託者　　佐久市教育委員会埋蔵文化財課

4　発掘調査所在地籍

芝宮遺跡群　南下中原遺跡Ⅱ　（ＮＳＭⅡ）

佐久市大字長土呂字南下中原　760 －１　760 －５　761 －３

5　調査期間及び面積

発掘調査　　平成５年５月10日～６月18日

整理調査　　平成６年10月３日～平成７年３月31日

面　　積　　２，１５９㎡

6　今回調査を行った南下中原遺跡Ⅱの各遺構番号は、昭和63年度に調査を行った南上中原・南下中原遺跡に続く位置にあるため継続番号を用いている。

7　本書の編集・執筆は佐々木宗昭が行った。ただし、第Ⅱ章遺跡の環境、第１節佐久市長土呂付近の自然環境は、佐久市埋蔵文化財調査報告書第23集『南上中原・南下中原遺跡発掘調査報告書』より転載した。

8　本書及び南下中原遺跡Ⅱ出土遺物等のすべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

本調査において、株式会社大進様をはじめ、長土呂区長の神津義久氏、そして、地元の方々には発掘調査中数々のご協力及びご援助を頂き、また、報告書作成にあたっても多くの方々よりご指導・ご助言を頂きました。記して感謝の意を表します。

本文目次

例　言
第Ⅰ章　発掘調査の経緯……1
　第１節　調査の経緯と経過……1
　第２節　調査の概要……2
第Ⅱ章　遺跡の環境……7
　第１節　佐久市長土呂付近の自然環境（地形と地質）……7
　第２節　遺跡の歴史的環境……9
第Ⅲ章　基本層序……12
第Ⅳ章　遺構と遺物……13
　第１節　竪穴住居址……13
　　１）Ｈ８号住居址……13
　　２）Ｈ12号住居址……16
　　３）Ｈ13号住居址……19
　　４）Ｈ14号住居址……24
　第２節　掘立柱建物址……28
　　１）Ｆ４号掘立柱建物址……28
　　２）Ｆ５号掘立柱建物址……28
　第３節　土　　坑……30
　　１）Ｄ17号土坑……30
　第４節　溝状遺構・旧河川……30
　　１）Ｍ４・Ｍ７溝状遺構……30
　　２）旧河川１……32
　第５節　グリッド・表採遺物……36

挿図目次

第１図　南下中原遺跡Ⅱの位置……1
第２図　南下中原遺跡Ⅱ全体図……4
第３図　南下中原遺跡Ⅱ発掘区設定図……5
第４図　南下中原遺跡Ⅱ及び南上中原・南下中原遺跡……6

第５図　浅間山の形態と構造（白倉原図）…… 8
第６図　黒斑山東部の破壊によって生じた
　　塚原泥流の流下した状態を示す図…… 8
第７図　周辺遺跡分布図……10
第８図　基本層序模式図……12
第９図　Ｈ８号住居址実測図……14
第10図　Ｈ８号住居址カマド実測図……15
第11図　Ｈ８号住居址出土土器・出土石器実測図……16
第12図　Ｈ12号住居址実測図……17
第13図　Ｈ12号住居址カマド実測図……18
第14図　Ｈ12号住居址出土土器実測図……18
第15図　Ｈ13号住居址実測図……20
第16図　Ｈ13号住居址カマド実測図……21
第17図　Ｈ13号住居址カマド実測図……22
第18図　Ｈ13号住居址出土土器実測図……22
第19図　Ｈ13号住居址出土土器実測図……23
第20図　Ｈ13号住居址出土土器・出土石器実測図……24
第21図　Ｈ14号住居址実測図……25
第22図　Ｈ14号住居址カマド実測図……26
第23図　Ｈ14号住居址カマド実測図……27
第24図　Ｈ14号住居址出土土器実測図……27
第25図　Ｆ４号掘立柱建物址実測図……28
第26図　Ｆ５号掘立柱建物址実測図……29
第27図　Ｄ17号土坑実測図……30
第28図　Ｍ４・Ｍ７溝状遺構実測図……31
第29図　Ｍ４溝状遺構出土土器実測図……32
第30図　旧河川１実測図……33
第31図　旧河川１土層断面図……34
第32図　旧河川１出土土器実測図……35
第33図　旧河川１出土土器・出土石器実測図……36
第34図　表採土器実測図……36

付表目次

第１表　浅間山を中心とした編年……9
第２表　周辺遺跡一覧表……11
第３表　南下中原遺跡Ⅱ出土土器観察表……37
Ｈ８号住居址……37　Ｈ12号住居址……37
Ｈ13号住居址……37・38　Ｈ14号住居址……38
Ｍ４溝状遺構……38・39　旧河川１……39・40
表採・グリッド……40
南下中原遺跡Ⅱ出土石器観察表……40

写真図版目次

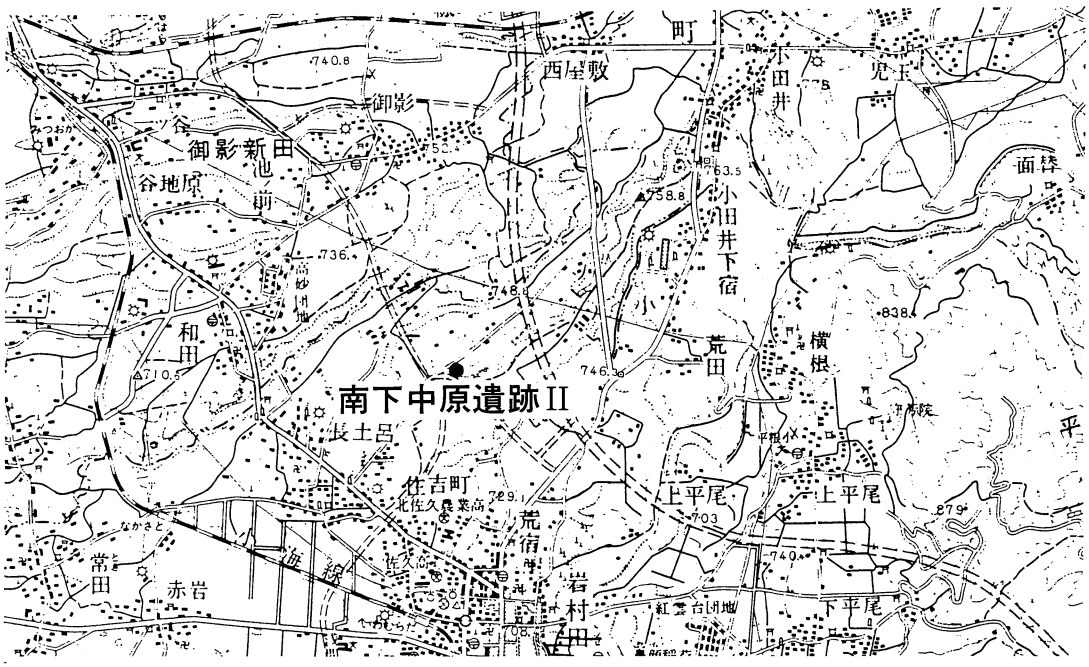
図版一　南下中原遺跡Ⅱ付近航空写真
図版二　1　Ｈ８号住居址
2　Ｈ８号住居址カマド
3　Ｈ８号住居址掘り方
4　Ｈ12号住居址
図版三　1　Ｈ12号住居址掘り方
2　Ｈ12号住居址カマド
3　Ｈ12号住居址カマド掘り方
4　Ｈ13号住居址
図版四　1　Ｈ13号住居址カマド
2　Ｈ13号住居址カマド石組
3　Ｈ13号住居址カマド石組
4　Ｈ13号住居址カマド掘り方
5　Ｈ14号住居址
図版五　1　Ｈ14号住居址掘り方
2　Ｈ14号住居址カマド
3　Ｈ14号住居址カマド
4　Ｈ14号住居址カマド
5　Ｈ14号住居址カマド
6　Ｈ14号住居址カマド
7　Ｈ14号住居址カマド掘り方
図版六　1　Ｆ４号掘立柱建物址
2　Ｄ17号土坑
図版七　1　Ｍ４溝状遺構東西方向
2　Ｍ４溝状遺構南北方向
3　Ｍ７溝状遺構掘り下げスナップ
4　旧河川１
5　旧河川１
図版八　1　旧河川１
2　旧河川１プラン
3　旧河川１掘り下げ状況
図版九　Ｈ８号住居址・Ｈ12号住居址・Ｈ13号住居址出土遺物
図版十　Ｈ13号住居址出土遺物
図版十一　Ｈ14号住居址・Ｍ４溝状遺構・旧河川１出土遺物
図版十二　旧河川１・表採遺物

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第１節　調査の経緯と経過

南下中原遺跡Ⅱの存在する芝宮遺跡群は、佐久市大字長土呂に所在し、浅間山に源を発する濁川の浸蝕による田切り地形の北側、標高720～760ｍを測る台地上に位置する。この台地の南側には長土呂遺跡群が展開しており、昭和63年度に南上中原・南下中原遺跡、及び、上聖端遺跡が調査され、昭和63年度・平成元年度には上大林遺跡、下聖端遺跡Ⅰ・Ⅱ、平成元年度に聖原遺跡Ⅱ、平成４年度に下聖端遺跡Ⅲの調査が実施された。さらに、平成元年度から平成５年度までに聖原遺跡で約85,000㎡に及ぶ調査が行われ、平成６年度も継続して実施されている。

今回、平成５年度出光興産松本支店が実施する佐久インターＳＳ（ガソリンスタンド）新築工事の計画地籍は、昭和63年度に調査が行なわれた南上中原・南下中原遺跡に隣接する地点であり遺構が包蔵されている可能性が大きかった。このため試掘調査を行ったところ遺構の存在が確認され、遺跡の破壊が余儀なくされる事態となり、緊急に記録保存する必要性が生じた。そこで、出光興産株式会社松本支店より佐久市教育委員会埋蔵文化財課が委託を受け、発掘調査を実施する運びとなった。



第１図　南下中原遺跡Ⅱの位置　（１：50000）

第２節　調査の概要

調査組織　佐久市教育委員会埋蔵文化課

教　　育　　長　大井季夫

教　育　次　長　奥原秀雄

埋蔵文化財課長　上原正秀

管　理　係　長　小林泰子

埋蔵文化財係長　草間芳行

埋蔵文化財係　　林　幸彦　高村博文　三石宗一　須藤隆司

小林眞寿　羽毛田卓也

冨沢一明　上原　学

調査担当者　　林　幸彦

調　査　主　任　佐々木宗昭　　調査副主任　堺　益子

調　　査　　員　堀籠　因　橋詰勝子　橋詰けさよ　橋詰信子

岩下吉代　岩下とも子　岩下文子　市川チイ子

武田千里　武田まつ子　堀込成子　市川愛子

金森治代　工藤しず子

報告書作成分担　遺物実測　堺　益子

遺物復元　堀籠　因　橋詰けさよ

図面修正　堺　益子　橋詰信子

トレース　堺　益子　橋詰勝子　橋詰信子

遺物写真　冨沢一明

図版作成　佐々木宗昭　橋詰信子

発掘区と遺構の検出

本調査の発掘区については第３図に示したとおりで、図の約2,100 ㎡が該当する。この発掘区については、昭和63年度に佐久埋蔵文化財調査センターによって調査が行なわれた「南上中原・南下中原遺跡」の北側に継続する地籍である。(第４図)

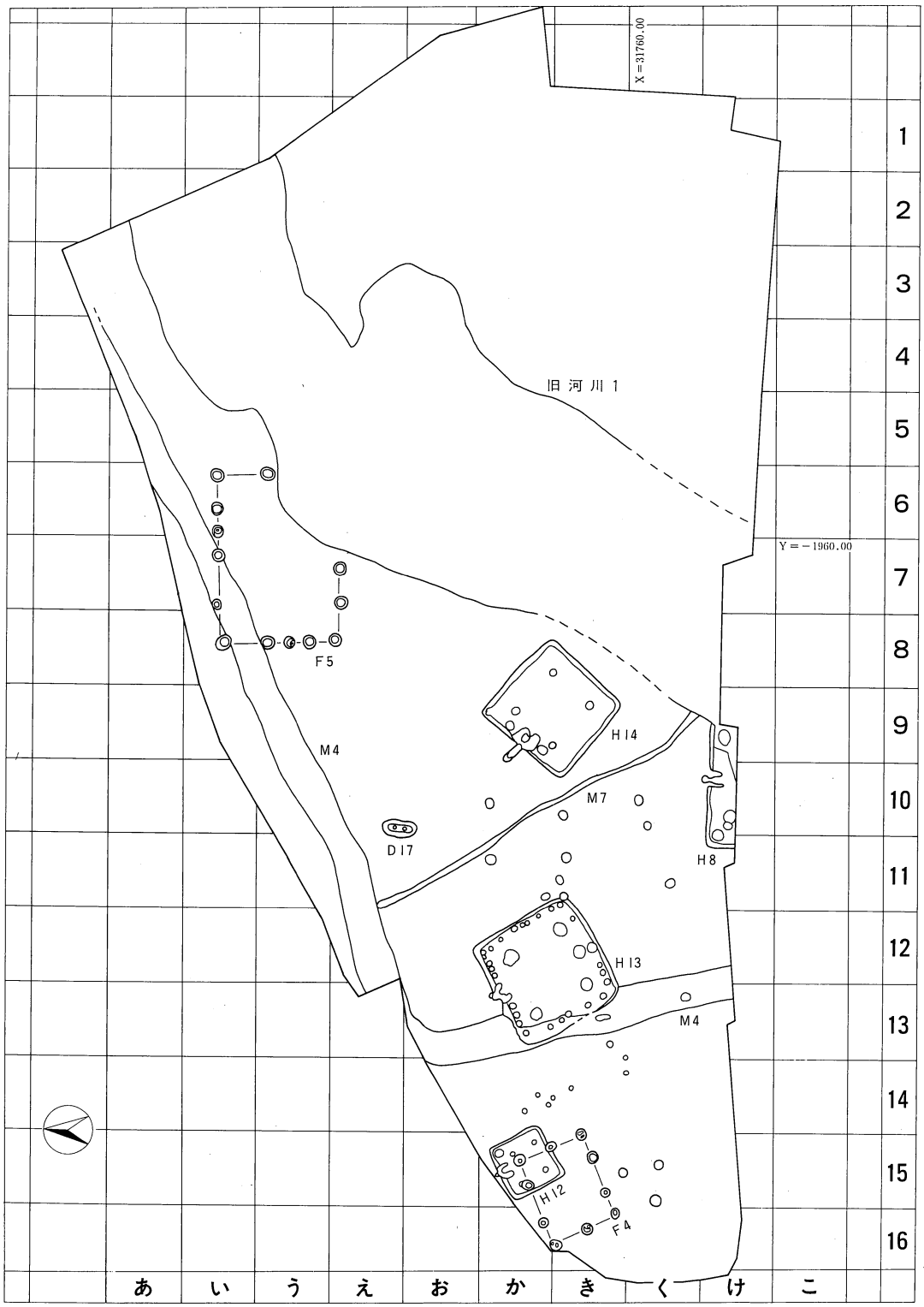
調査は、調査対象区についてまず自然地形と遺跡の範囲をみきわめるため、重機により東西・南北に試掘トレンチを入れてみた。その結果おおよその自然地形と遺跡の範囲をとらえることができ、更に昭和63年度に調査が行なわれた「南上中原・南下中原遺跡」において遺構の約半分が

調査区域外となったＨ８号住居址、及びＭ４溝状遺構、旧河川１の続きが本調査区内で確認された。このため、遺跡全部分の表土を重機によって除去し発掘調査を行った。

調査区から検出された遺構の概要は、住居址４軒、掘立柱建物址２棟、溝２条、旧河川等が検出され、古墳時代後期～平安時代を主とする遺跡であった。なお縄文時代の土坑も一基確認されている。

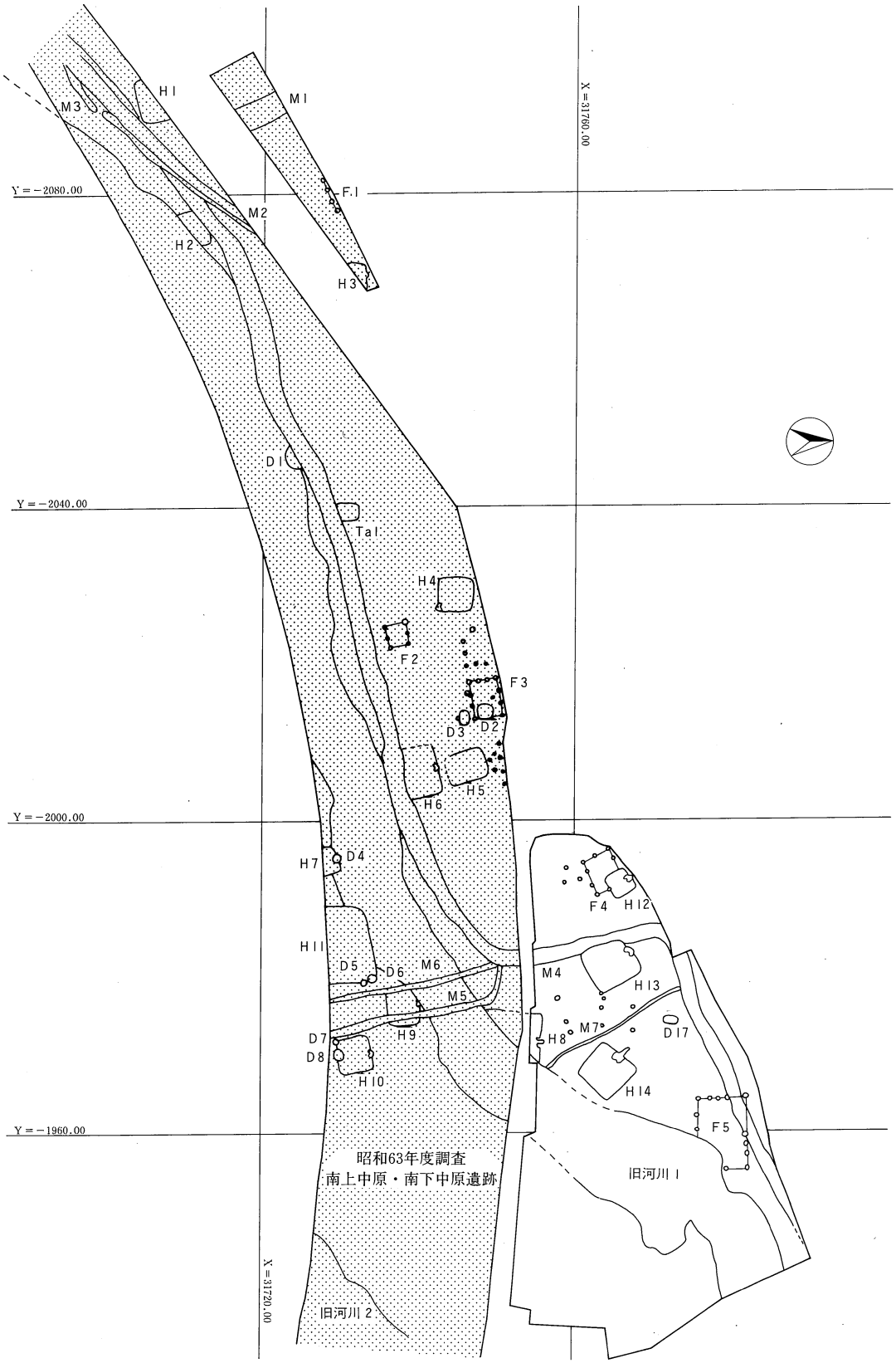
住　居　址	Ｈ８号住居址	（古墳時代後期）
	Ｈ12号住居址	（古墳時代後期）
	Ｈ13号住居址	（古墳時代末～奈良時代初期）
	Ｈ14号住居址	（古墳時代後期）
掘立柱建物址	Ｆ４号掘立柱建物址	（古墳時代後期以後）
	Ｆ５号掘立柱建物址	（平安時代以前）
溝	Ｍ４溝状遺構	（平安時代以後）
	Ｍ７溝状遺構	（平安時代以前）
土　坑（陥し穴）	Ｄ17号土坑	（縄文時代）
旧　河　川１		（平安時代後期以前）

南下中原遺跡Ⅱと南上中原・南下中原遺跡
（↖印、現在佐久インターチェンジのアクセス道路となっている）



第2図　南下中原遺跡Ⅱ全体図　（1：350）

第３図　南下中原遺跡Ⅱ発掘区設定図　（１：5000）



第4図　南下中原遺跡Ⅱ及び南上中原・南下中原遺跡　（1：800）

第Ⅱ章　遺跡の環境

第１節　佐久市長土呂付近の自然環境（地形と地質）

南上中原・南下中原遺跡は佐久市の最西北端の小諸市との境に位置している。この付近一帯は北方にそびえている浅間火山の噴出物によって地質構成させている地帯で、この地域環境を記載するには先ず浅間山の構成からはじめなければならない。

浅間山は群馬長野県境の上信越高原国立公園の最南端にある火山国日本の中においても珍しい代表的な活火山で現在も盛んに噴煙を上げていることで知られている。それに加えて研究史の長いこと、火山活動の記録が古くから残されていること、火山形態が各面から具備していることなどにもよりわが国東西交通の要路中山道・信越線沿いにあり、活動している火山として時に大噴火をして周辺に災害を及ぼすことにあり、四季の風望の変化のすばらしさなどによって古来文学絵画の対象ともなり多くの作品も残されている。

浅間山は黒斑山・前掛山・中央釜山の三重式成層火山で標高2,560ｍ、四方からの眺望の変化があり、しかも常に噴煙を上げ続けているので人目につき易いが、特に南方佐久市側から見渡す形態が実にすばらしい。

火山構造も含めて図示したものが第２図であるがコニーデ型の裾野と三重式噴火口寄生火山火口瀬など火山の模型を見るようである。しかも噴煙は上空の偏西風によって東に傾くことが多いため大噴火による災害も南側には及ばないのが現状である。

しかし長い火山活動の歴史をたどって見ると南方佐久市側にも噴火の状況を語る噴出物溶岩火山灰火山砂礫の堆積層が多く残されている。浅間山は我が国の火山としては最も新しい若い火山で第１次黒斑火山の活動を開始したのが新生代第四紀洪積末期であるが黒斑火山最盛期には単式成層火山で標高2,800ｍを越える大型火山であった。その整然とした大火山は噴火口の東半分以上を破壊する大爆発によってその山体を失ってしまった。

その時の噴出溶岩熱水泥流の大部分が主として南方に流下して佐久市中佐都付近まで押出している。その堆積物は現在ＪＲ中佐都駅付近を中心として塚原・赤岩・平塚部落付近の田園地に散在し、松島湾に浮ぶ松島のように並んでいる泥流残丘である。基盤整備以前はその数100を越す大小残丘が浅間山頂方向から放射状に並んでおり地名の起源にもなっている。岩質の研究結果から黒斑岸壁に残っている岩石と同一であることが実証されている。

その破壊された黒斑火山の中心から再び活発な火山活動が再開されたのが前掛山に成長するわけであるが、その過程の長い期間における多量な噴出物である軽石流火砕流（熱火山灰砂軽石溶岩流）と降下火山灰砂が少なくとも二回以上に亘って佐久市北半部浅間火山南麓に厚さ20～30m以上堆積した。

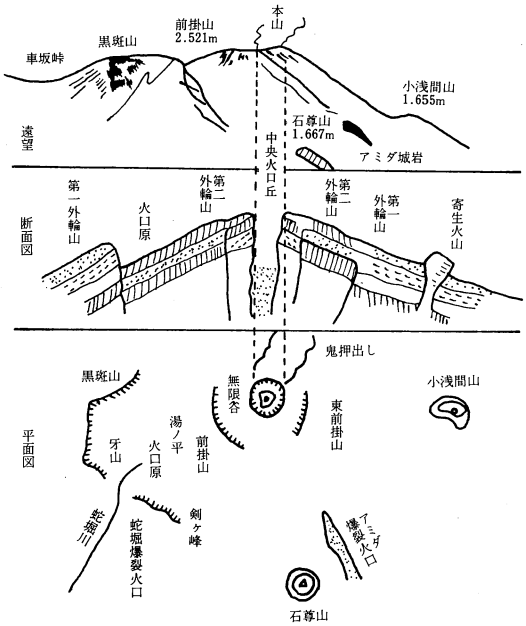
これは浅間山の南面追分原以南・佐久市中込原・西端は小諸市懐古園西まで広範囲に亘って約223kmに分布し、佐久平北半部の生活地表面を形成して第一・第二軽石流と呼ばれている。（第一軽石流をＰ１層、第二軽石流をＰ２層と命名されている。）

この軽石流は南東面の湯川を埋め、一部に湖沼状態も作り、湿地水中堆積層も各地に作り、浅間火山南麓面の凹凸地形面を平坦化した。

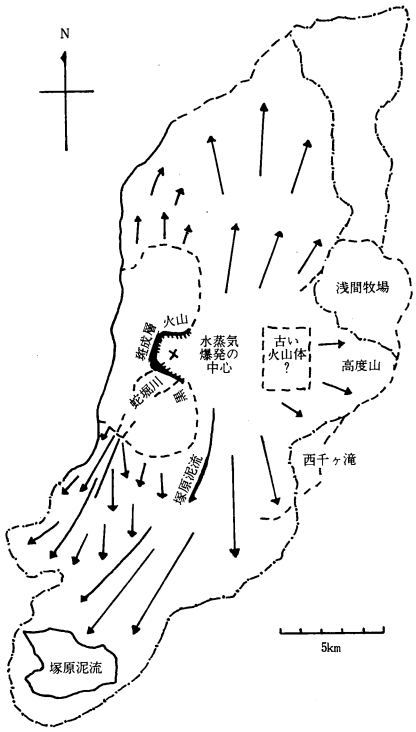
この大規模な第一軽石流Ｐ１と小規模な第二軽石流Ｐ２は南方中込原で尖滅している。

Ｐ１とＰ２の間隔があった事を物語る20cm内外の黒土層が各所の田切り断面で確認されている。

この軽石流Ｐ１・Ｐ２の地表面は火山灰砂軽石の堆積層で火山から噴出したままのもので固結凝集が不充分であるために、水の浸蝕には頗る弱く豪雨洪水には地形面に大きな変化を受ける。従ってこの地帯には火山山麓特有な地形“田切り”が多く見られる。浅間山麓標高1,000m内外に分布する湧水（湧玉・



第５図　浅間山の形態と構造（白倉　原図）

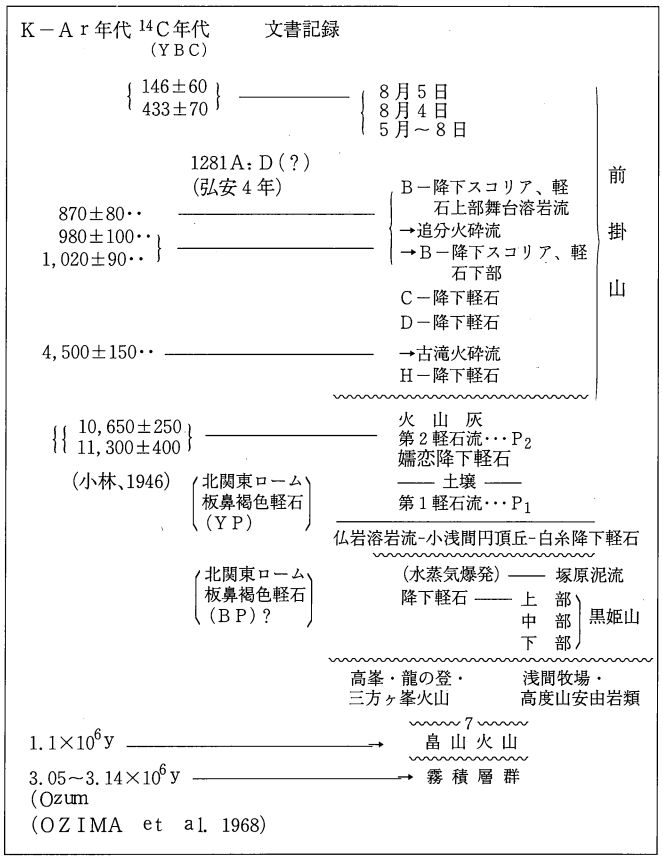


第６図　黒斑山東部の破壊によって生じた塚原泥流の流下した状態を示す図（荒牧重雄著「浅間山の地質」による）

濁り・白糸・千ヶ滝）火口瀬蛇掘川などの浸蝕作用がこれにあたるわけである。湯川の谷も田切りの最大なものを見ることが出来るが浅間山麓から佐久平にかけて田切りの深い谷はその数大小合わせて、50を越えている。田切りは山麓湧水地下水の流下流路ともなっており、弥生時代以来この周辺の標高750m以下の稲田耕作をささえてきたとも考えられ、田切りの分布と遺跡分布・古い集落分布には深い関係が見られるようである。

南下中原遺跡Ⅱはこの田切り密集地帯の中心部にある。濁りの田切りの谷幅は約100m、北西方向小諸市境の大田切りは谷幅150mを超し、谷底に御代田町からの湧玉用水が流れており何れも谷底には古い水田が拓かれており、下流300m付近からは肥沃な中佐都美田地域に続いている。長土呂部落の地名の起源もこの低湿地に基づくと言われている。

第1表　浅間山を中心とした編年
（荒牧重雄著「浅間山火山の地質」による。一部加除）



（白倉盛男）

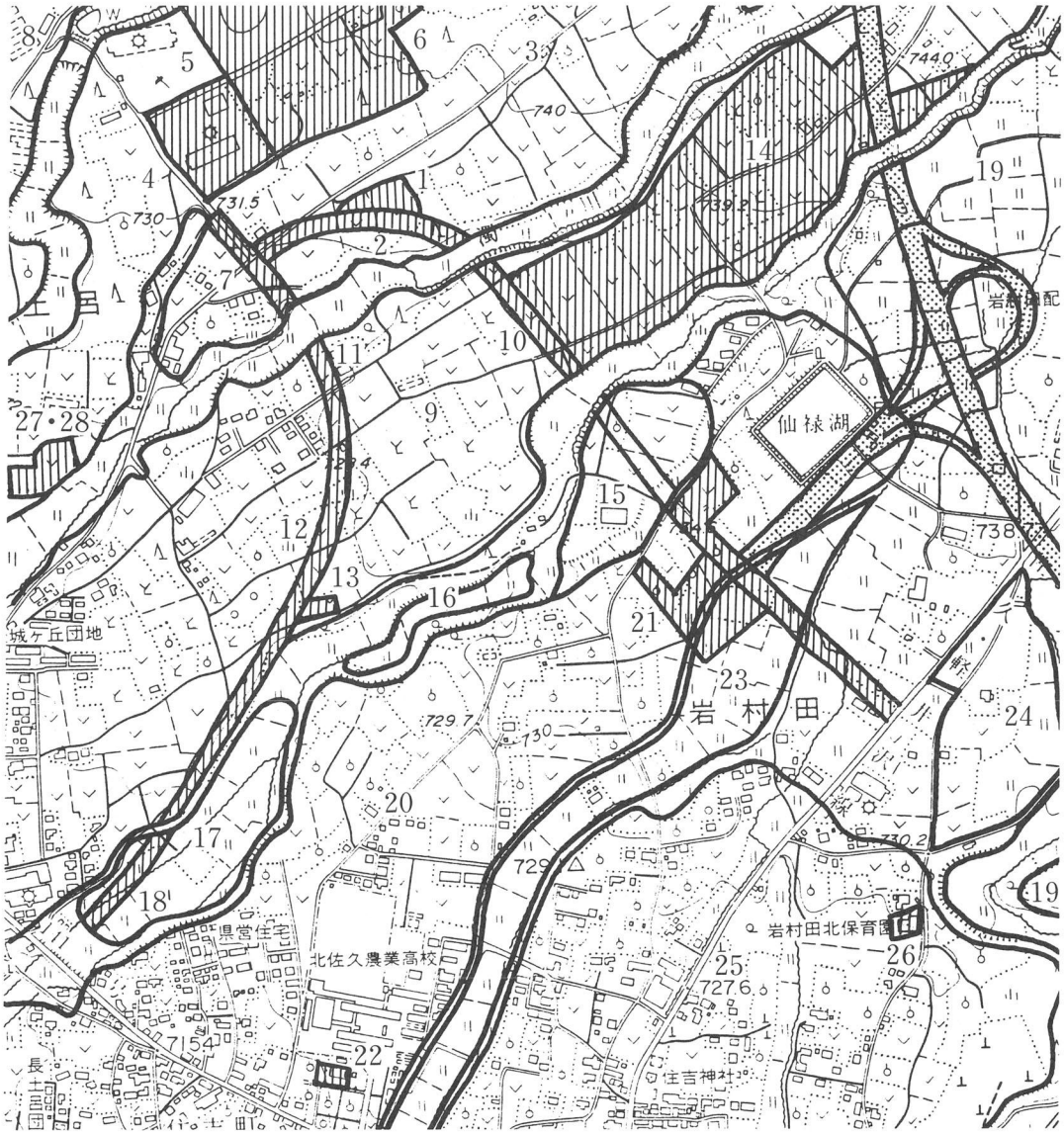
（参考文献）

1　白倉盛男　1971　浅間山と火山博物館　小諸市立火山博物館

2　荒牧重雄　1968　浅間火山の地質　地学団体研究会

第2節　遺跡の歴史的環境

今回発掘調査を行った南下中原遺跡Ⅱは、佐久市の北部に展開する芝宮遺跡群の南西部に位置し、標高は730m付近を測る。この地域は、御代田方面から南西にのびる田切り地形が非常に発達しており、この田切りに挟まれた台地上には、北方に近津遺跡群・周防畑遺跡群、南方に長土呂遺跡群・栗毛坂遺跡群・枇杷坂遺跡群・岩村田遺跡群などが展開しており、佐久市でも有数な



第７図　周辺遺跡分布図（１：10000）

遺跡群が密集している地域である。

今回調査を行った芝宮遺跡群付近は、昭和61年度から長野県埋蔵文化財センターによって行われた上信越自動車道関係の調査をはじめ、国道141 号バイパスなどの道路整備事業、佐久流通業務団地造成事業等に伴う大規模な発掘調査が行われた地域である。なお、今回の発掘区は昭和63年度において佐久インターチェンジのアクセス道路整備に伴い調査が行われた南上中原・南下中原遺跡の北側に継続する位置にある。

昭和60年度以後における本遺跡群内の周辺で行われた主な発掘調査を概観してみると、昭和62

第２表　周辺遺跡一覧表

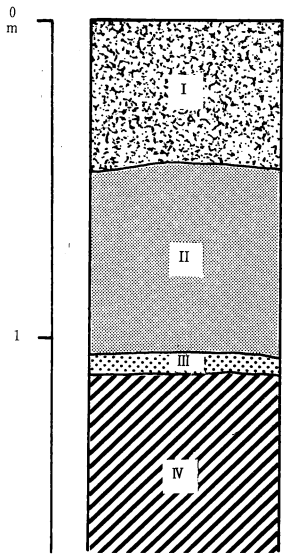
No.	佐分No.	遺跡名	所在地	立地	時代						備考
					縄	弥	古	奈	平	中	
1		南下中原遺跡Ⅱ	長土呂字南下中原	台地	○		○	○	○		本調査
2		南上中原・南下中原遺跡	長土呂字南上中原・南下中原	〃			○	○	○		
3	8	芝宮遺跡群	長土呂字北上中原・北中中原	〃	○	○	○	○	○		
4	8－1	芝宮遺跡第一次	長土呂字北下中原	〃	○	○	○	○	○		昭和54年度調査
5	8－2	芝宮遺跡第二次	長土呂字北中中原	〃	○	○	○	○	○		昭和55年度調査
6	8－3	芝宮遺跡第三次	長土呂字北中中原	〃	○	○	○	○	○		昭和57年度調査
7		芝宮遺跡第Ⅰ～Ⅳ	長土呂字下芝宮・南下中原	〃			○	○	○		昭和62.63、平成２年度調査
8	7	周防畑遺跡群	長土呂字周防畑・上北原　他	〃	○	○	○	○	○		
9	9	長土呂遺跡群	長土呂字長土呂隠し・聖石　他	〃		○	○	○	○	○	
10		上聖端遺跡	長土呂字上聖端	〃			○	○	○		昭和63年度調査
11		上大林遺跡	長土呂字上大林・下大林	〃			○	○	○		昭和63年度調査
12		下聖端遺跡Ⅰ・Ⅱ	長土呂字下聖端・南聖原	〃		○	○	○	○		昭和63年、平成元年度調査
13		下聖端遺跡Ⅲ	長土呂字下聖端	〃			○				平成４年度調査
14		聖原遺跡	長土呂字上聖端・新城　他	〃			○	○	○		
15	541	曽根新城跡	岩村田字下穴虫	〃	○				○		平成元年～５年度調査
16	45	新城遺跡	岩村田字新城	低地		○	○	○	○		
17	38	下蟹沢遺跡	長土呂字下蟹沢・中蟹沢	〃		○	○	○	○		
18		下蟹沢遺跡	長土呂字下蟹沢・中蟹沢	〃		○	○	○	○		
19	10	栗毛坂遺跡群	岩村田字東赤座・赤座頭　他	台地		○	○	○	○		
20	41	枇杷坂遺跡群	岩村田字枇杷坂・久保田頭　他	〃		○	○	○	○		
21		上久保田向遺跡Ⅰ～Ⅶ	岩村田字上久保田向	〃					○		平成元年～６年度調査
22	41－1	琵琶坂遺跡	岩村田字琵琶坂	〃				○	○		昭和60年度調査
23	42	中久保田遺跡	岩村田字中久保田・下久保田	〃		○	○	○	○		
24	43	西赤座遺跡	岩村田字西赤座　他	〃		○	○	○	○		
25	52	岩村田遺跡群	岩村田字六供後・六供　他	〃		○	○	○	○	○	
26	52－1	六供後遺跡	岩村田字六供後	〃		○				○	昭和55年度調査
27		上高山遺跡Ⅱ	長土呂字上高山	〃				○			平成３年度調査
28		高山遺跡	長土呂字上高山	台地					○		平成５年度調査

年度からは国道141 号バイパス関係の発掘調査が開始された。本遺跡の西側に隣接する下芝宮遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの調査が昭和62・63年度、平成２年度に実施され、古墳時代中期から平安時代の竪穴住居址９棟、掘立柱建物址６棟などが検出されている。本遺跡群の南に展開する長土呂遺跡群においては、国道141 号バイパスの延長として、昭和63年度・平成元年度に上大林遺跡、下聖端遺跡Ⅰ・Ⅱの調査が行われ、弥生時代後期から平安時代の竪穴住居址60棟、掘立柱建物址18棟等が検出された。また、当遺跡の対岸に位置する上聖端遺跡、さらに東方に広がる聖原遺跡は、昭和63年度から平成４年度まで調査が実施され、上聖端遺跡・聖原遺跡で、竪穴住居址約830 棟、掘立柱建物址約700 棟にのぼる遺構が検出されている。聖原遺跡については平成元年から平成６年にかけて調査が継続されており、現在までの調査面積は約85,000㎡に達し竪穴住居址900 棟、掘立柱建物址800 棟を越える数が検出されている。

第Ⅲ章　基本層序

芝宮遺跡群は、佐久市の北部、浅間山南麓末端部地域に位置し、標高は720 ～760ｍ前後を測り、南西に向って緩やかに傾斜する。南下中原遺跡Ⅱは、芝宮遺跡群の南西部に位置し、標高は730 ｍ付近を測る。また、南側の田切りの幅は約50ｍ、比高差は約10ｍを測る。

本遺跡における基本土層は、耕作が直接第Ⅳ層明黄褐色ローム層まで達している箇所が多く、大半が第一層耕作土直下が第Ⅳ層明黄褐色ローム層であり、その間に僅かに両層の漸移層が存在する。しかし、調査区の西側、南東側に第Ⅱ層黒色土が約50㎝程堆積する箇所がある。したがって、本遺跡の遺構検出面は、大半が第Ⅲ・Ⅳ層であり、部分的に第Ⅱ層である。



第８図　基本層序模式図

第Ⅰ層　暗褐色土層（10ＹＲ３／３）
耕作土

第Ⅱ層　黒色土層（10ＹＲ２／１）
パミス・ローム粒子を僅か含む。

第Ⅲ層　暗褐色土層（10ＹＲ３／４）
漸移層

第Ⅳ層　明黄褐色土層（10ＹＲ７／６）
ローム層、浅間第一軽石流

第一層耕作土は、40～50㎝を測り、厚さは全体にほぼ均一である。第Ⅱ層は調査区西側及び南東側に、50㎝程度の厚さで堆積する黒色土で、パミス・ローム粒子を僅かに含む。本層上面でＨ12号住居址・Ｆ４号掘立柱建物址が検出され、第Ⅳ層まで達する。第Ⅲ層は第Ⅰ層または第Ⅱ層と第Ⅳ層との間に約10㎝の厚さで部分的にみられる漸移層である。

今回調査を行った遺構の大半は、第Ⅳ層上面において検出されたが、Ｍ４溝状遺構の一部は第Ⅱ層上面で検出され、第Ⅳ層まで達する。

第Ⅳ章　遺構と遺物

第１節　竪穴住居址

1)　Ｈ８号住居址（第９図～11図、図版二・九）

本住居址は、調査区の南側中央部付近けー９・10グリッド内に位置し、全体層序第Ⅳ層上面において検出された。本址は昭和63年度に調査を行った「南上中原・南下中原遺跡」において、Ｈ８号住居址の調査区外となった北側に残存する部分である。旧河川１と重複関係にあり、東部を破壊される。平面形態及び規模については、東壁が破壊を受けているため明確ではないが、今回検出された部分（第９図）と、前回確認された部分を接合した全体プランから推し（第４図南下中原遺跡Ⅱ及び南上中原・南下中原遺跡)、東西680㎝、南北800㎝の隅丸長方形を呈するものと思われる。

確認面からの壁高は、北壁で48～56㎝、西壁で40～48㎝を測り、床面から比較的急傾斜で立ち上る。壁体は地山の黄色ローム層によって構築され、平坦で堅固な状態である。壁溝が北壁及び西壁に検出された。床面からの深さ５～７㎝、幅６㎝前後で断面形は「Ｕ字形」を呈する。なお、前回の調査で確認されている西壁の南寄りには壁溝が認められなかったことから本壁溝は一周せず、西壁の中央部付近で立ち上ることが考えられる。床面は、東側が旧河川１により破壊されている。しかし、残存する部分から、床面は黒褐色土（第７層）・褐色土（第８層）を埋め戻し、さらに２～５㎝の厚さでにぶい黄褐色土（第６層）を埋め戻して貼り床が施されている。床面の状態は全体に平坦で堅固である。

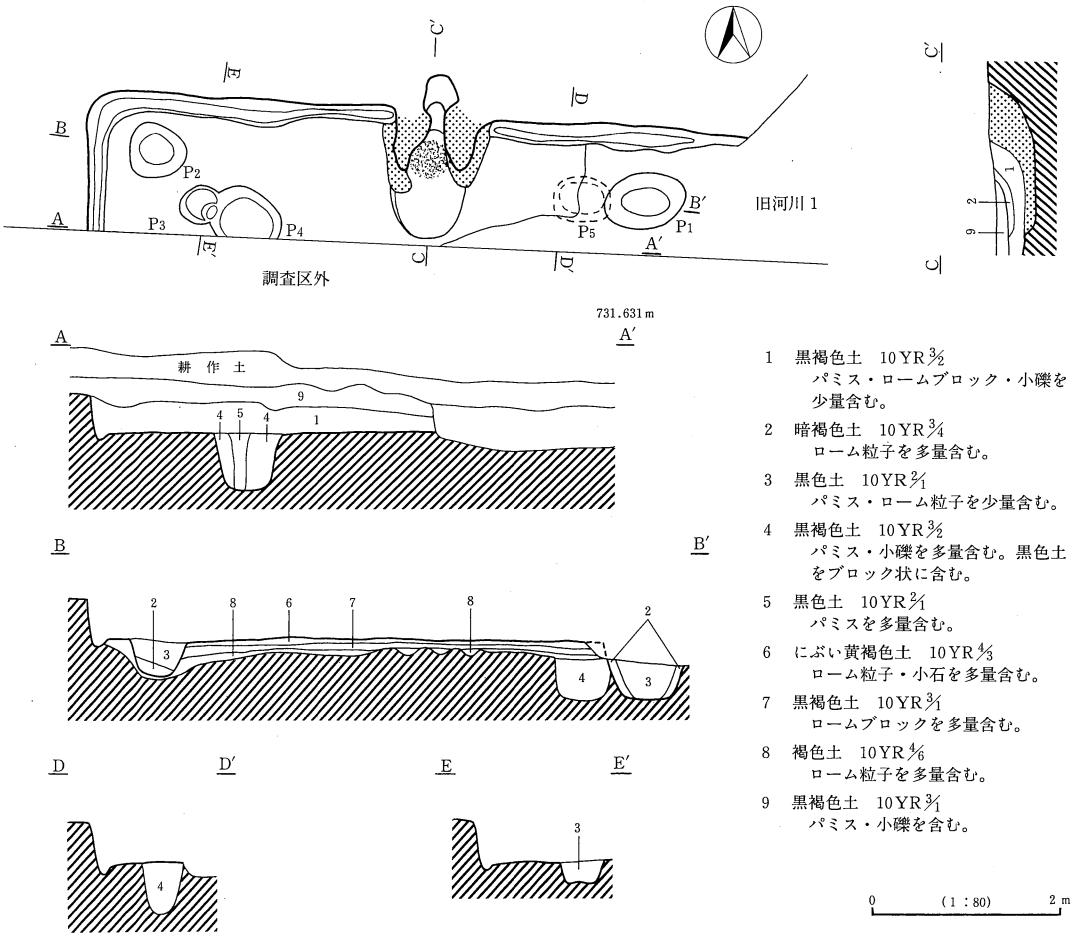
ピットは、前回の調査分と合せ６個が確認された。その内５個（P1～P5）は今回の調査で確認され、主柱穴はP4と考えられる。72×64㎝の楕円形を呈し、60㎝の深度を有している。また、P5は床面下より検出され、64×48㎝の楕円形を呈し、40㎝の深度を有する。本ピットの用途などは不明である。なお、P1の上部は旧河川１による破壊を受けており、砂礫下約24㎝で確認された。形態は80×64㎝の楕円形を呈し、約40㎝の深度を有する。

カマドは、北壁のほぼ中央部と思われる箇所に設置されていた。燃焼部奥と煙道部が比較的よい状態で遺存しており、当部の天井は一部残存していた（第10図)。しかし他は、失なわれており旧状は留めていない。燃焼部の袖の基部は、地山を一部堀り残して袖部とし、第10図カマド断面図に示したように白色粘土をその上に貼って構築されている。煙道部の底面は白色粘土（第１

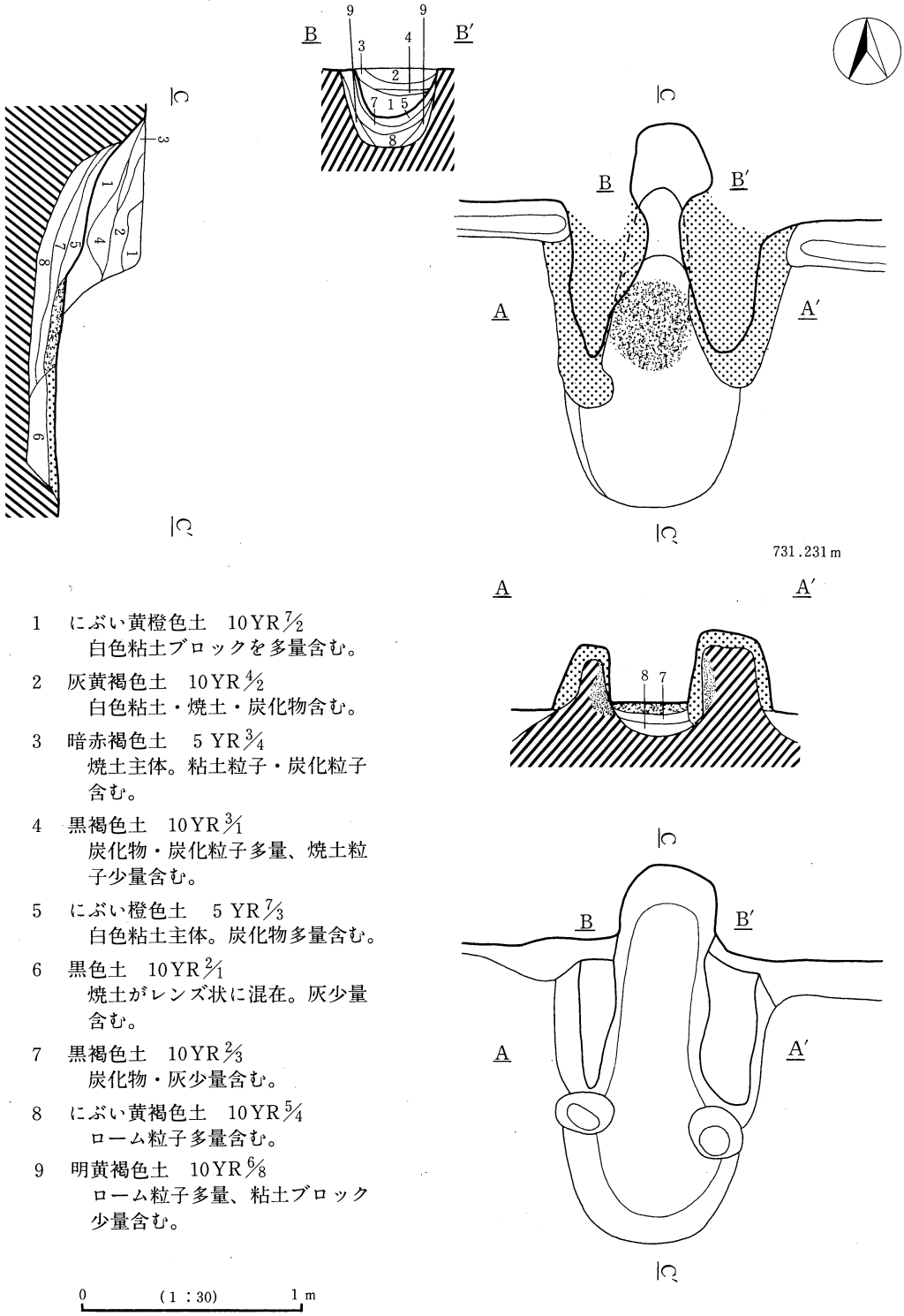
層）によって、深さ形状を調整され当部は著しく焼け込み、炭化物が混入していた。煙道部の堀り方は幅42㎝前後で、深さは第10図Ｂ－Ｂ′で40㎝を測り、壁外へ約50㎝出張っていた。

本住居址からは、土師器・紡錘車（滑石）が出土しており、そのうち５点が図示できた。土師器の器種には、甕・坏がある。甕には11－１・２の２点があり、２は胴部下半から底部にかけての破片である。２点いずれも全体の形状は不明であるが、胴部は砲弾形となるものと思われる。坏には、11－３・４があり、２点とも内面は黒色処理が行なわれている。紡錘車は北西隅の壁下、床面直上部より出土した。

本住居址の所産期は、出土した土師器甕・坏などに古墳時代後期の土器様相を見いだすことができ、また、旧河川１との重複関係から古墳時代後期と考えられる。



第９図　Ｈ８号住居址実測図



1　にぶい黄橙色土　10YR 7/2
　白色粘土ブロックを多量含む。

2　灰黄褐色土　10YR 4/2
　白色粘土・焼土・炭化物含む。

3　暗赤褐色土　5 YR 3/4
　焼土主体。粘土粒子・炭化粒子含む。

4　黒褐色土　10YR 3/1
　炭化物・炭化粒子多量、焼土粒子少量含む。

5　にぶい橙色土　5 YR 7/3
　白色粘土主体。炭化物多量含む。

6　黒色土　10YR 2/1
　焼土がレンズ状に混在。灰少量含む。

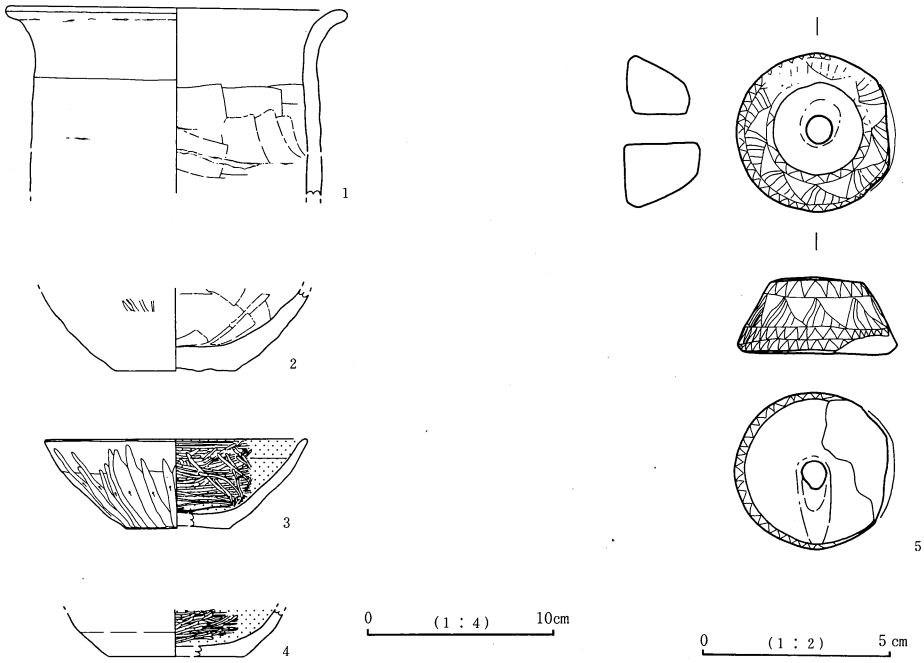
7　黒褐色土　10YR 2/3
　炭化物・灰少量含む。

8　にぶい黄褐色土　10YR 5/4
　ローム粒子多量含む。

9　明黄褐色土　10YR 6/8
　ローム粒子多量、粘土ブロック少量含む。

0　(1：30)　1 m

第10図　H 8 号住居址カマド実測図



第11図　Ｈ８号住居址出土土器・出土石器実測図

2)　H12号住居址（第12図～14図、図版二・三・九）

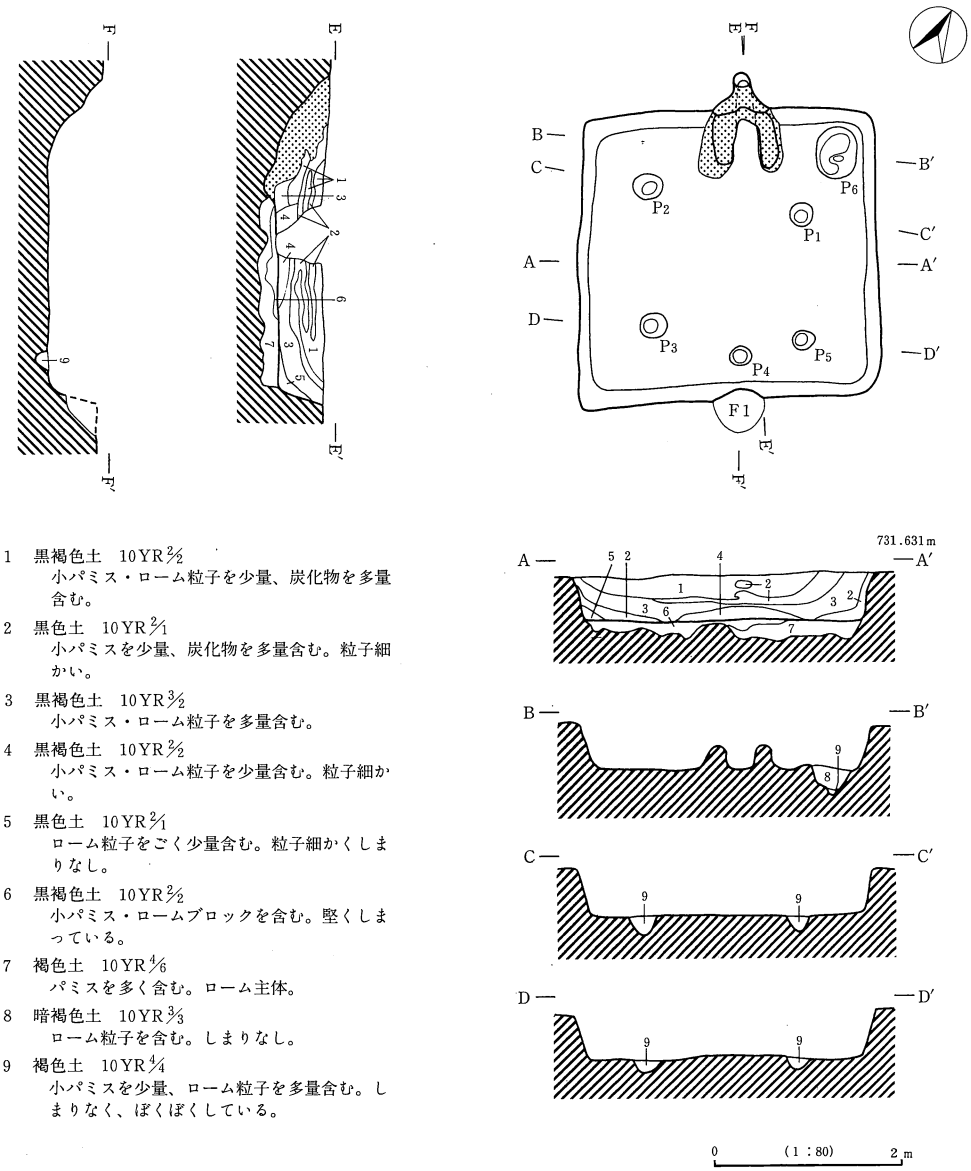
本住居址は、調査区の西端付近か－15グリット内に位置し、全体層序第Ⅱ層の上面において検出された。Ｆ４号掘立柱建物址と重複関係にあり、本址の南壁中央部は、P10 に破壊されている。平面形態及び規模は、東壁約290㎝、西壁約300㎝、南壁約320㎝、北壁約300㎝を測り、隅丸正方形を呈している。

確認面からの壁高は、40～60㎝を測り、床面から急傾斜で立ち上る。壁体は地山の黄色ローム層（第８図Ⅳ層）を主体としているものの、上部は暗褐色土（第８図Ⅲ層）であった。床面は、黒褐色土（第６層）・褐色土（第７層）を埋め戻して張り床が施されている。床面の状態は全体に平坦で堅固である。壁溝は検出されなかった。ピットは６個検出され、その内方形に配されるP1・P2・P3・P5の４個は、主柱穴であろう。平面形態は、径25～30㎝の円形で、深度は15～20㎝を測る。P6はカマドの東脇に配され、55×40㎝の楕円形を呈し深度約30㎝を測る。用途は明確ではないが貯蔵穴であることも考えられる。

カマドは、北壁のほぼ中央部に設置されていた。燃焼部奥と煙道部が比較的よい状態で遺存しており、当部の天井は一部残存していた。燃焼部の袖の基部は、地山を一部掘り残して袖部とし第13図カマド断面図に示したように淡橙色の粘土をその上に貼って構築されている。煙道部の掘り方は、壁体を半円状に掘り込み、壁外へ約30㎝前後出張っている。

本住居址からは、土師器が出土しており、そのうちの３点が図示できた（14図）。器種は甕（14－３）・坏（14－１・２）である。

本址の所産期は、出土遺物が少なく時期を特定できる遺物に乏しいが土師器坏（有段口縁坏14－１）に古墳時代後期の様相を見いだすことができ、また、Ｆ４号掘立柱建物址との重複関係から、本住居址の所産期は古墳時代後期と考えておきたい。



1　黒褐色土　10YR 2/2
小パミス・ローム粒子を少量、炭化物を多量含む。

2　黒色土　10YR 2/1
小パミスを少量、炭化物を多量含む。粒子細かい。

3　黒褐色土　10YR 3/2
小パミス・ローム粒子を多量含む。

4　黒褐色土　10YR 2/2
小パミス・ローム粒子を少量含む。粒子細かい。

5　黒色土　10YR 2/1
ローム粒子をごく少量含む。粒子細かくしまりなし。

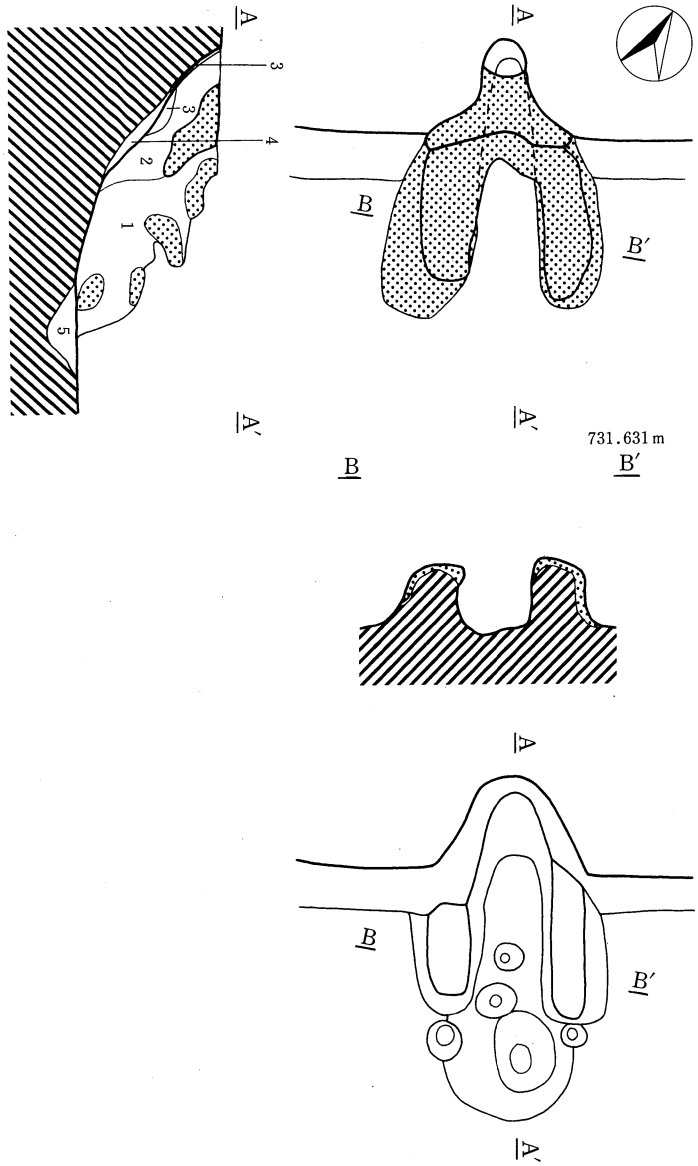
6　黒褐色土　10YR 2/2
小パミス・ロームブロックを含む。堅くしまっている。

7　褐色土　10YR 4/6
パミスを多く含む。ローム主体。

8　暗褐色土　10YR 3/3
ローム粒子を含む。しまりなし。

9　褐色土　10YR 4/4
小パミスを少量、ローム粒子を多量含む。しまりなく、ぼくぼくしている。

第12図　H12号住居址実測図



1　黒褐色土　7.5YR3/1
粘土ブロック・粘土粒子含む。きめ細かく軟らかい。

2　褐色土　7.5YR4/3
粘土ブロックを多量含む。

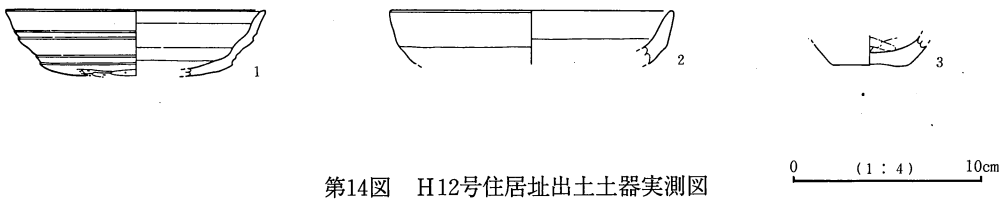
3　にぶい黄褐色土　10YR3/4
ローム粒子を多量含む。

4　褐灰色土　10YR4/1
灰を多量含む。きめ細かい。

5　褐色土　10YR4/4
ロームを多量含む。

0　(1：30)　1 m

第13図　H12号住居址カマド実測図



第14図　H12号住居址出土土器実測図

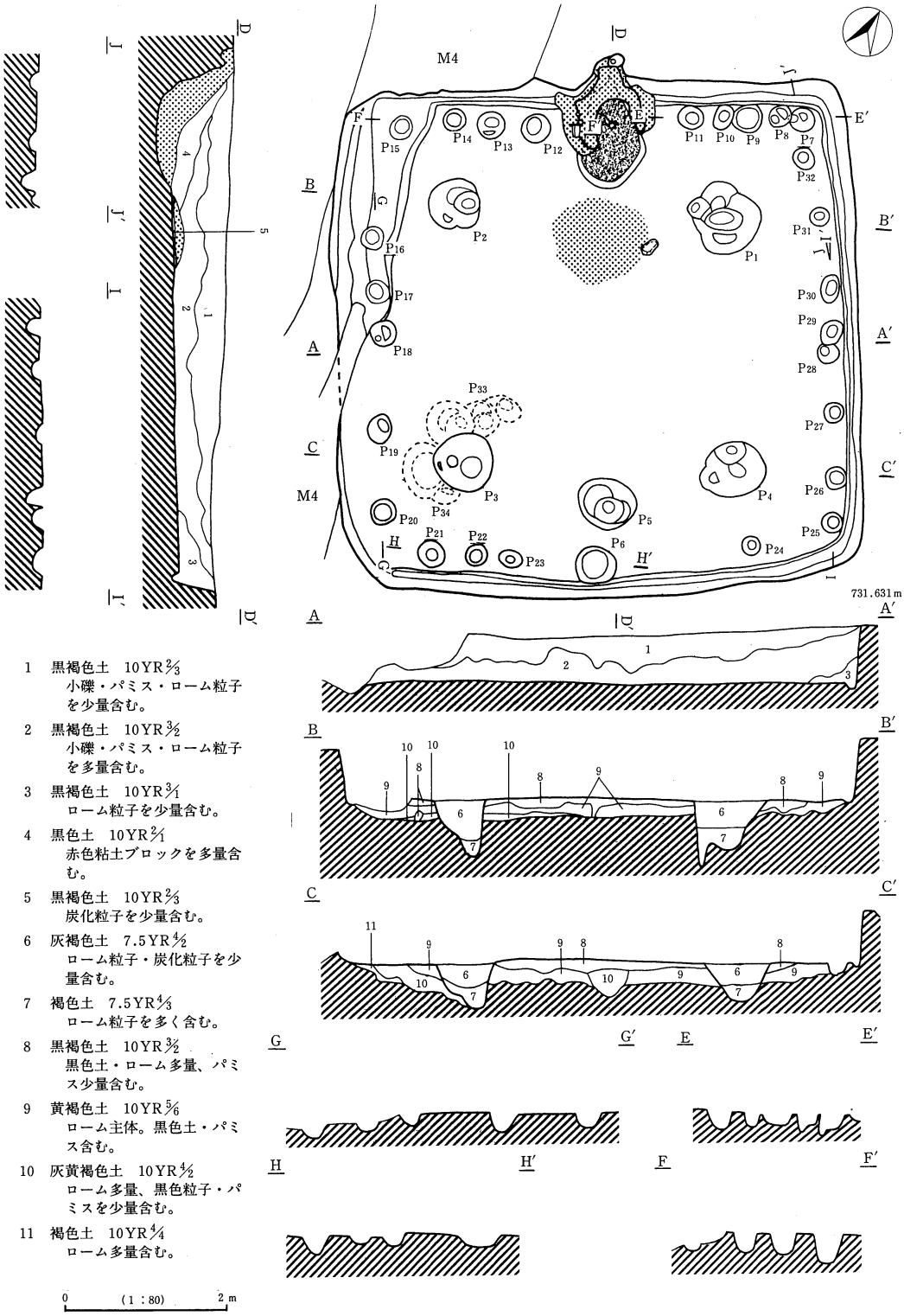
3)　H13号住居址（第15図～20図、図版三・四・九・十）

本住居址は、調査区の西側か・き－12・13グリッド内に位置し、全体層序第Ⅳ層上面において検出された。M４溝状遺構と重複関係にあり西北コーナー及び西壁の上部大半は破壊されている。しかし、図版三－４に示したように本址西壁の一部は、破壊を受けているもののM４溝状遺構内に、その一部が残存していることが認められた。そして、B－B′付近の壁面は、M４溝状遺構の立ち上り面とほぼ同じ位置であることが確認された。平面形態及び規模は、東壁560㎝、南壁620㎝を測り、西壁、北壁は残存するプランから推し、約570㎝、600㎝の隅丸正方形を呈することが考えられる。

確認面からの壁高は、60～100㎝を測り、調査区域内で検出された住居址の中では、最も深い形態を示す。壁体は、地山の黄色ローム層（第８図Ⅳ層）を主体とし、床面から急傾斜で立ち上る。壁溝が、東、南、北の各壁下に検出された。なお、西壁下の壁溝については、大半がM４溝状遺構に破壊されているため明確ではないが、残存する西南付近からは確認されなかったため西壁下の溝は配されなかったことも考えられる。床面からの深さは４～５㎝、幅４～７㎝前後で断面形状は「U字形」を呈する。床面は、主に灰黄褐色土（第10層）・黄褐色土（第９層）を埋め戻し、さらに２～10㎝の厚さで黒褐色土を埋め戻して貼り床が施されている。床面の状態は全体に平坦で堅固である。なお、P1、P2間の床には、白色粘土が高さ16㎝、径120㎝前後の範囲で「墳丘状」に残存していた（第15図）。しかし、用途などについては明確にされなかった。

ピットは、総数で34個検出された。その内でP1・P2・P3・P4は、方形に配された主柱穴であろう。P1～P4の規模、形態は径60～80㎝の楕円形を呈し、深さは50～80㎝を測る。また、第15図に示したように、径20～30㎝、深さ20～30㎝を測る円形のピットが、壁溝に添って27個（P7～P32）配されていた。また、P33・P34 は床面下より認められたが、用途などは不明である。

カマドは、北壁のほぼ中央部に設置されていた。燃焼部の奥と煙道部が比較的よい状態で遺存しており、当部の天井は一部残存していた。しかし、天井部の大半は失なわれており、旧状を留めていない。燃焼部及び煙道部は、暗赤褐色土層（第６層）・褐色土層（第７層）を埋め戻して構築され、深さ・形状の調整を図っていた（第16図）。支脚石の先端は、第６層内に埋め込まれて固定されていた。燃焼部の袖は、長方形に面取りされた軽石を組み合せて芯とし、当部を赤橙色の粘土で固定して構築されている。煙道の立ち上りは、壁面とほぼ同じ角度で燃焼部から急傾斜で立ち上り、壁外へ約45㎝出張っている。なお、当部先端は、煙り出しをより促すためであろうか煙筒（15×20㎝）と思われる堀り込みが窺われる。また、煙道が立ち上った箇所に残存する天井部内には、芯の強化も兼ねてか土師器の甕片が混在する。因に、当部内から出土した破片と本址覆土内より出土したものを接合復元すると第18図１の土師器甕（口縁～胴部）が復元された。



1 黒褐色土 10YR2/3
小礫・パミス・ローム粒子を少量含む。

2 黒褐色土 10YR3/2
小礫・パミス・ローム粒子を多量含む。

3 黒褐色土 10YR3/1
ローム粒子を少量含む。

4 黒色土 10YR2/1
赤色粘土ブロックを多量含む。

5 黒褐色土 10YR2/3
炭化粒子を少量含む。

6 灰褐色土 7.5YR4/2
ローム粒子・炭化粒子を少量含む。

7 褐色土 7.5YR4/3
ローム粒子を多く含む。

8 黒褐色土 10YR3/2
黒色土・ローム多量、パミス少量含む。

9 黄褐色土 10YR5/6
ローム主体。黒色土・パミス含む。

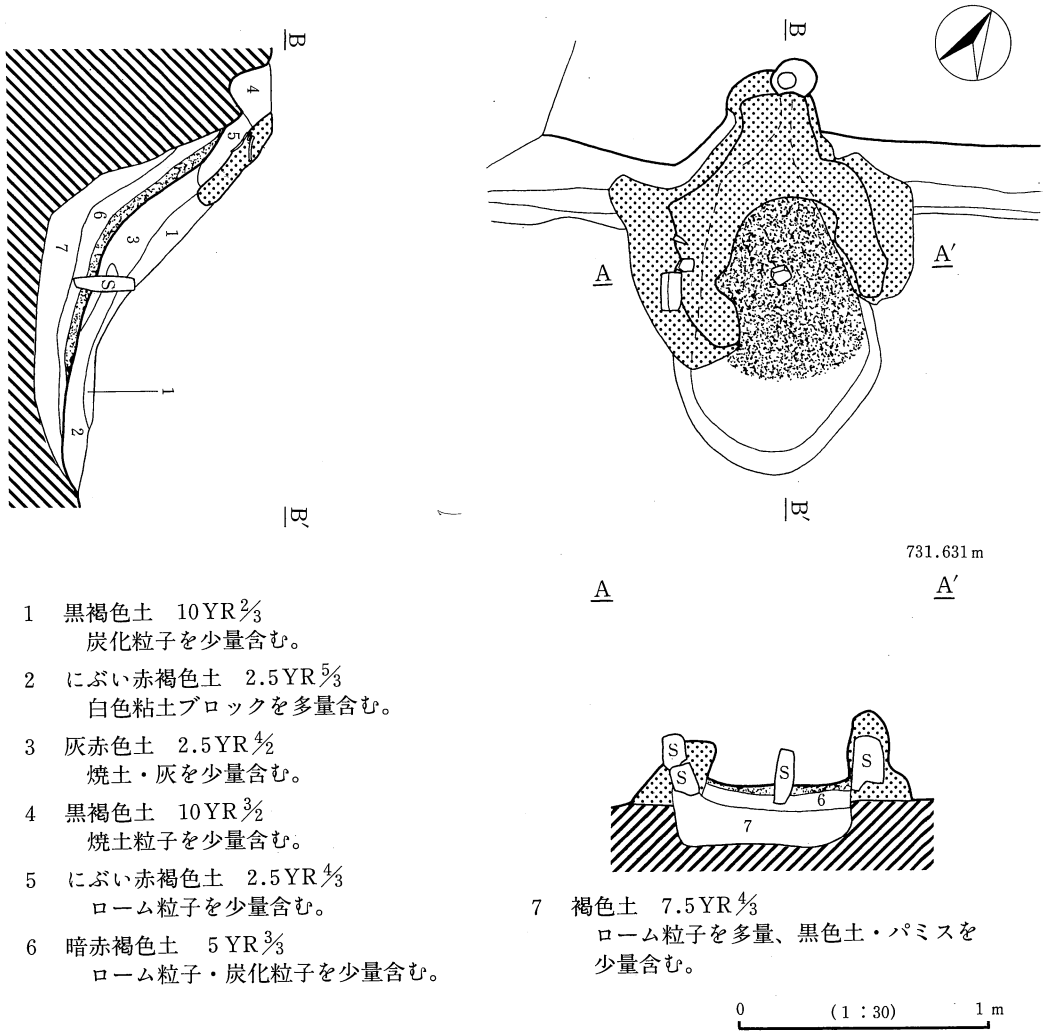
10 灰黄褐色土 10YR4/2
ローム多量、黒色粒子・パミスを少量含む。

11 褐色土 10YR4/4
ローム多量含む。

第15図 H13号住居址実測図

本址からは、土師器・須恵器・凹石などが出土しており、その内の21点が図示できた（第18図～20図）。土師器の器種には、坏・甕・高坏があり、須恵器の器種は、坏・蓋などがある。土師器の坏は、19－５・６・７・８の４点でいずれも接合復元の結果、ほぼ完形に近い器形となった。これらの坏は、外面体部の調整がヘラケズリで、口縁部はヨコナデが施される。19－８は、有段口縁坏である。土師器甕は６点が図化され、18－１・19－１・２の外面はヘラケズリである。

本住居址の所産期は、出土した土器から古墳時代末～奈良時代初期の様相を見いだすことができ、またＭ４溝状遺構との重複関係から古墳時代末～奈良時代初期と思われる。



1　黒褐色土　10YR 2/3
　炭化粒子を少量含む。

2　にぶい赤褐色土　2.5YR 5/3
　白色粘土ブロックを多量含む。

3　灰赤色土　2.5YR 4/2
　焼土・灰を少量含む。

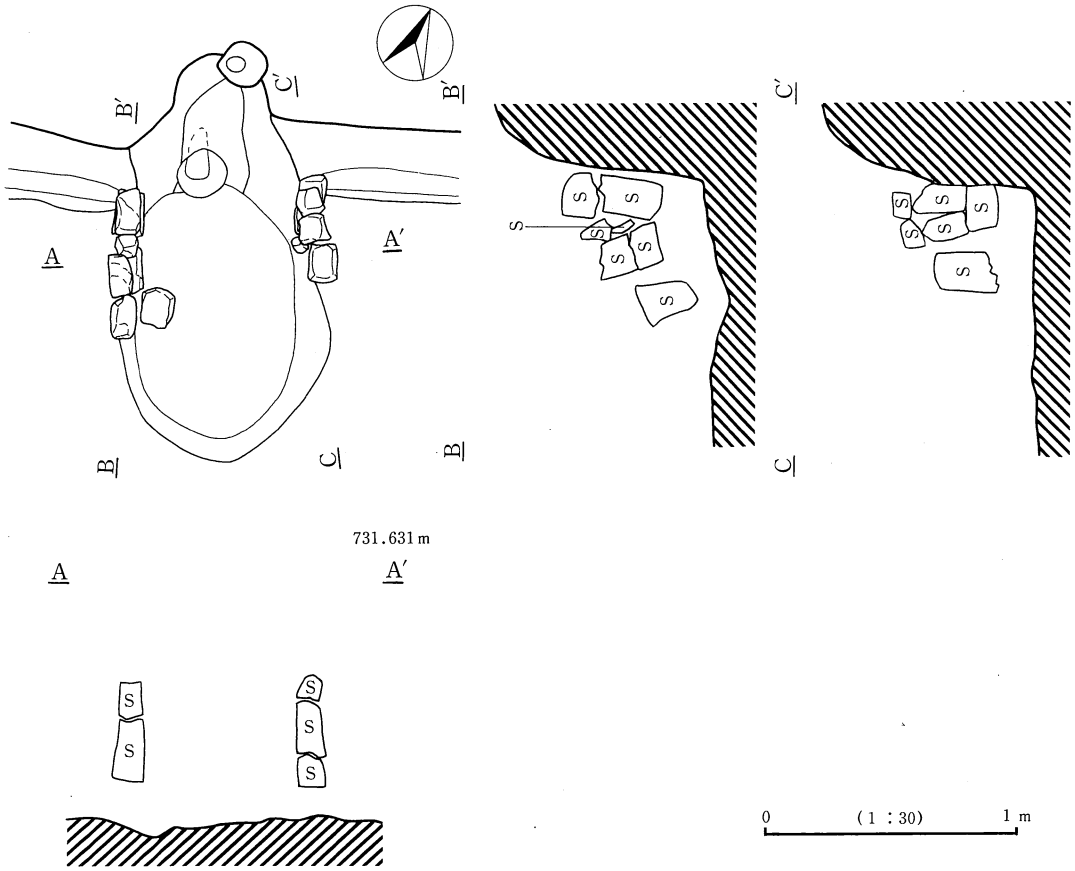
4　黒褐色土　10YR 3/2
　焼土粒子を少量含む。

5　にぶい赤褐色土　2.5YR 4/3
　ローム粒子を少量含む。

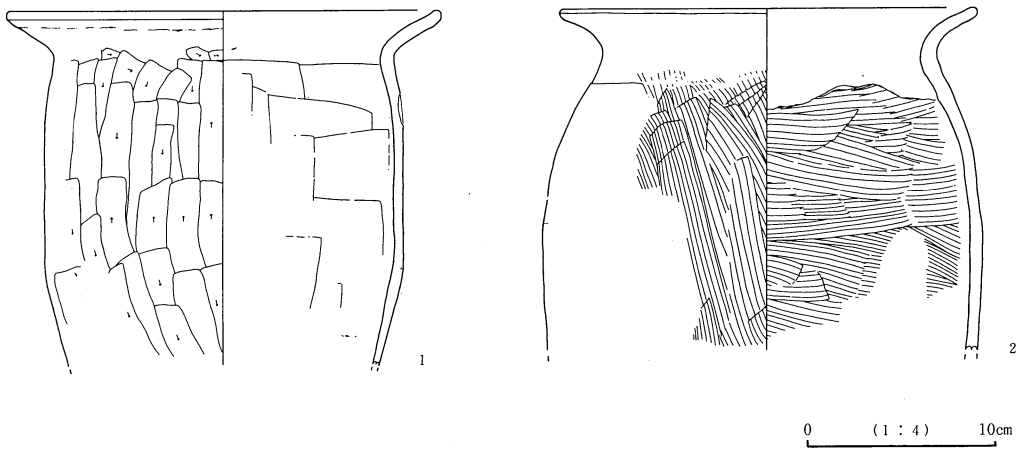
6　暗赤褐色土　5YR 3/3
　ローム粒子・炭化粒子を少量含む。

7　褐色土　7.5YR 4/3
　ローム粒子を多量、黒色土・パミスを少量含む。

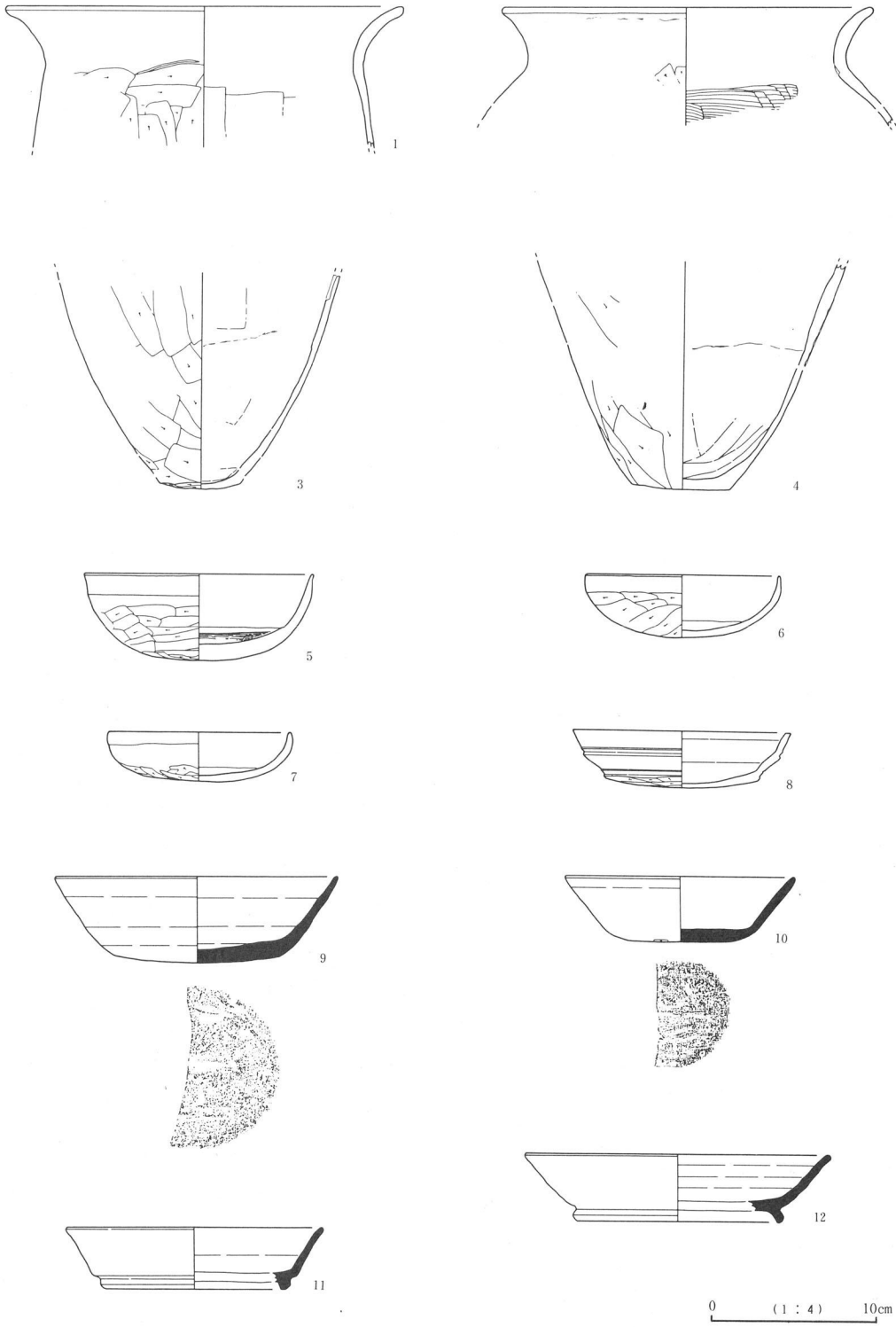
第16図　H13号住居址カマド実測図



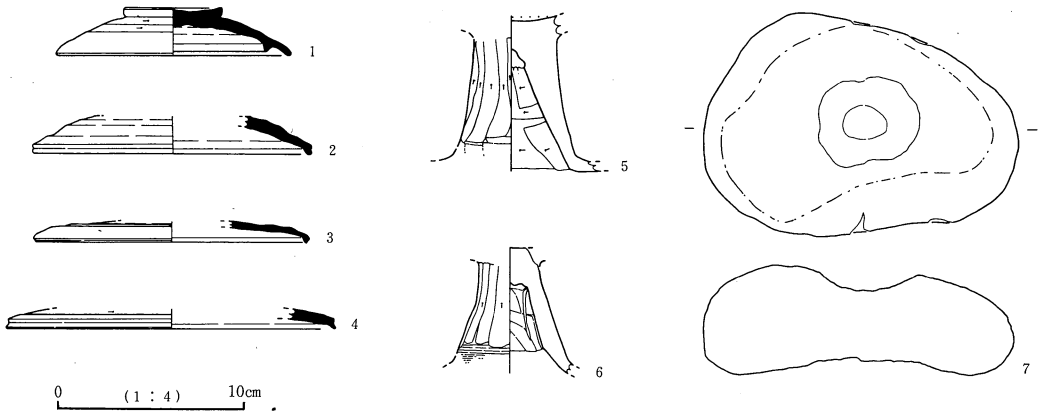
第17図　H13号住居址カマド実測図



第18図　H13号住居址カマド実測図



第19図 H13号住居址出土土器実測図



第20図　H13号住居址出土土器・出土石器実測図

4)　H14号住居址（第21図～24図、図版四・五・十一）

本住居址は、調査区の中央部付近か・き－８・９グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層（第８図）の上面において検出された。平面形態及び規模は、東壁540 ㎝、西壁510㎝、南壁530㎝、北壁550㎝を測り、隅丸正方形を呈する。

確認面からの壁高は、40～50㎝を測り、床面から急傾斜で立ち上る。壁下には、壁溝がほぼ一周する状態で配される。深さは、床面より６～10㎝、幅16～38㎝を測り、東壁側が比較的幅広く配される。床面は、褐色土（第６層）を埋め戻し、さらに２～７㎝の厚さで暗褐色土（第５層）を埋めて貼り床が施されている。床面はほぼ平坦で堅固である。また、床面のP1・P2付近には炭化材が検出されたこと、さらに覆土第１・２層中には多量の炭化材が混在することから推し、本址は焼失住居と考えられる。ピットは６個検出され、その内P1～P4は方形に配された主柱穴であろう。径40～48㎝の円形を呈し、深さは50～80㎝を測る。また、４本の主柱穴の形態は、西側に配されるP2・P3の深さが、共に50㎝前後であるのに対し、東側のP1・P4は80㎝前後と対象的な深さで配列されていることが窺われる。なお、P5・P6はカマドの両脇より検出された。

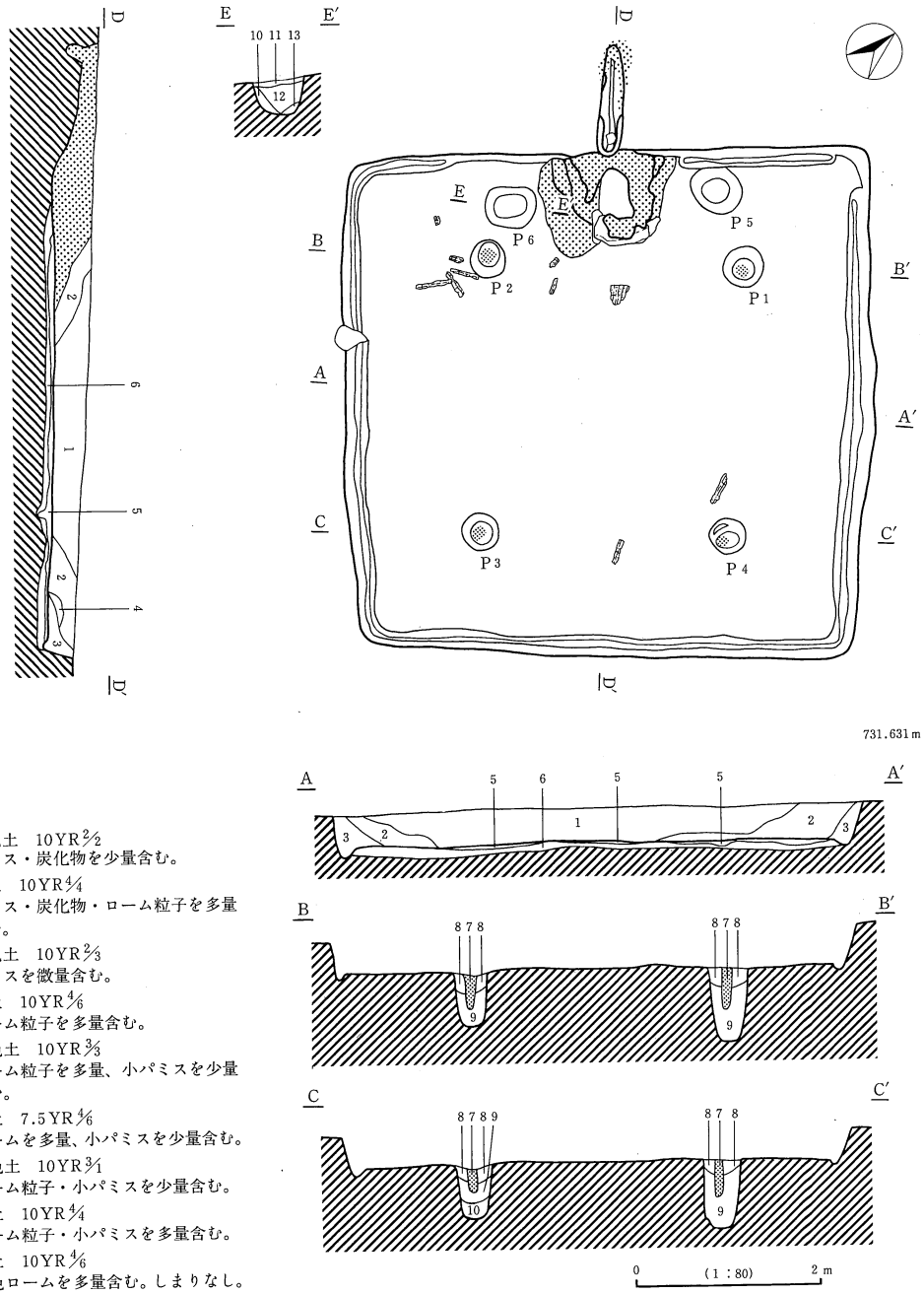
カマドは、北壁中央部に設置され、遺存状況は比較的良好であった。燃焼部及び煙道部は、粘土・褐色土（第７層）を埋め戻し、深さ・形状を調整している。燃焼部の袖の基部は、地山を一部堀り残して袖部とし、その上に黒褐色土、粘土、炭化物等を混ぜた土で貼り袖を構築している。

また、焚口部は、両脇に自然石を配し、その上に長さ60㎝、幅30㎝前後の天井石が渡されている。煙道は幅20㎝前後を測り、壁体より約115㎝出張った細長い形状を有している。

本住居址からは、土師器が出土しており、そのうち５点が図示できた（第24図）。器種は坏（24－１・２）、甕（24－３・４・５）がある。坏２点の器形はほぼ把握され、外面の体部調整はヘラミガキが行われ、内面は、ヘラミガキ後黒色処理が施されている。甕３点いずれも全体の形状

は不明であるが、胴部は砲弾形となるものと思われる。

本住居址の所産期は、出土した土師器の坏などに古墳時代後期の土器様相を見いだすことができ、古墳時代後期と考えられる。



1　黒褐色土　10YR2/2
　パミス・炭化物を少量含む。

2　褐色土　10YR4/4
　パミス・炭化物・ローム粒子を多量含む。

3　黒褐色土　10YR2/3
　パミスを微量含む。

4　褐色土　10YR4/6
　ローム粒子を多量含む。

5　暗褐色土　10YR3/3
　ローム粒子を多量、小パミスを少量含む。

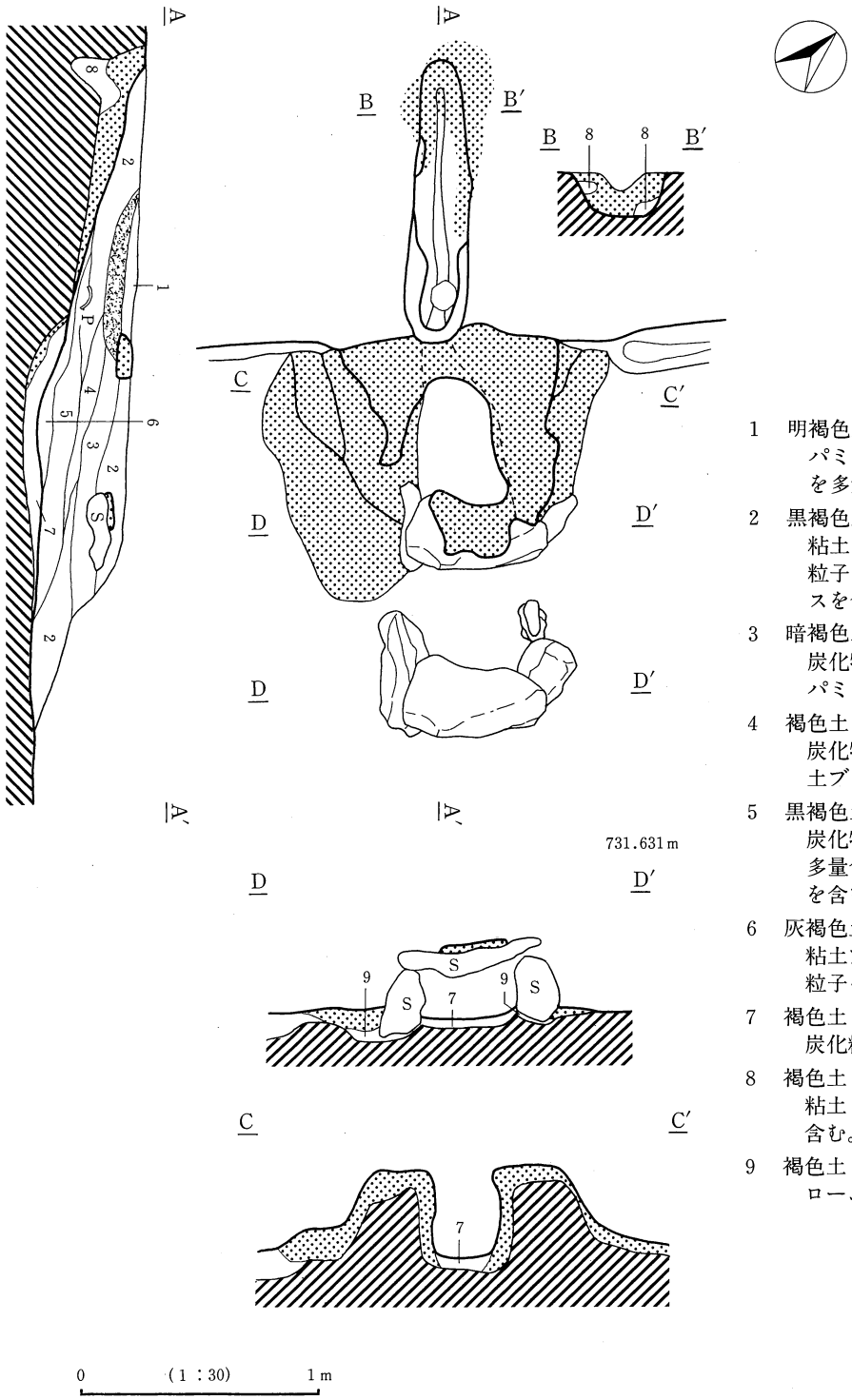
6　褐色土　7.5YR4/6
　ロームを多量、小パミスを少量含む。

7　黒褐色土　10YR3/1
　ローム粒子・小パミスを少量含む。

8　褐色土　10YR4/4
　ローム粒子・小パミスを多量含む。

9　褐色土　10YR4/6
　黄色ロームを多量含む。しまりなし。

第21図　H14号住居址実測図



1　明褐色土　7.5YR 5/8
　パミス・ローム粒子を多量含む。

2　黒褐色土　10YR 3/2
　粘土ブロック・粘土粒子・炭化物・パミスを含む。

3　暗褐色土　10YR 3/4
　炭化物・焼土粒子・パミスを少量含む。

4　褐色土　10YR 4/6
　炭化物・パミス・粘土ブロックを含む。

5　黒褐色土　7.5YR 7/1
　炭化物・粘土粒子を多量含む。焼土粒子を含む。

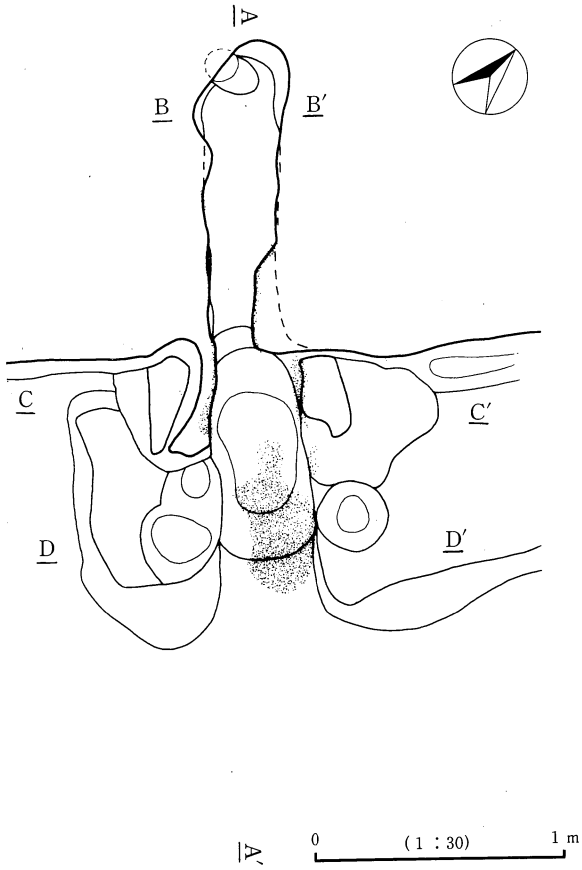
6　灰褐色土　7.5YR 4/2
　粘土ブロック・粘土粒子を多量含む。

7　褐色土　7.5YR 4/3
　炭化粒子・灰を含む。

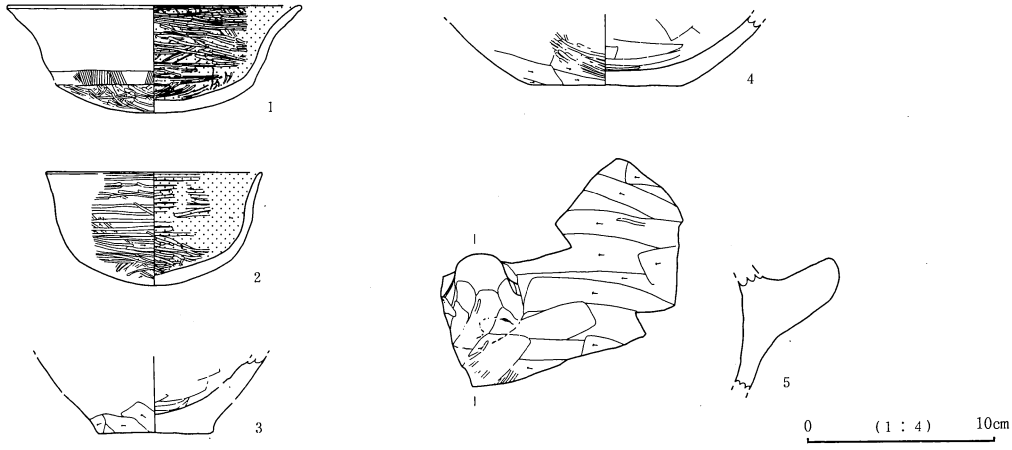
8　褐色土　10YR 4/6
　粘土・ローム粒子を含む。

9　褐色土　7.5YR 4/4
　ロームを多量含む。

第22図　H14号住居址カマド実測図



第23図　H14号住居址カマド実測図



第24図　H14号住居址出土土器実測図

第2節　掘立柱建物址

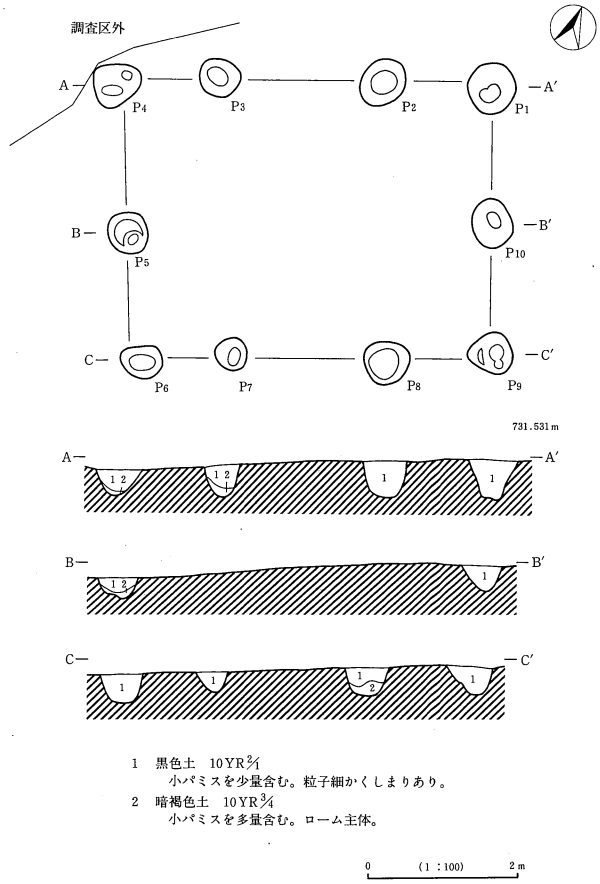
1)　Ｆ４号掘立柱建物址

（第25図、図版六）

本址は、調査区の西端付近き－15グリッド内に位置する。H12号住居址と重複関係にあり、本址がH12号住居址を切っている。

平面形態は、東西に長い長方形を呈する側柱式の建物址である。規模は、東西３間500㎝、南北２間350㎝を測る。柱間寸法は桁行が130～220㎝、梁間が170～200㎝を測る。柱穴は、円形を基調とし、P4・P6・P9は楕円形を呈する。規模は径40～70㎝、深さは30～50㎝を測る。

本址の所産期は、遺物の出土がなく不明である。しかし、古墳時代後期のH12号住居址を切っていることから、古墳時代後期以後であろう。



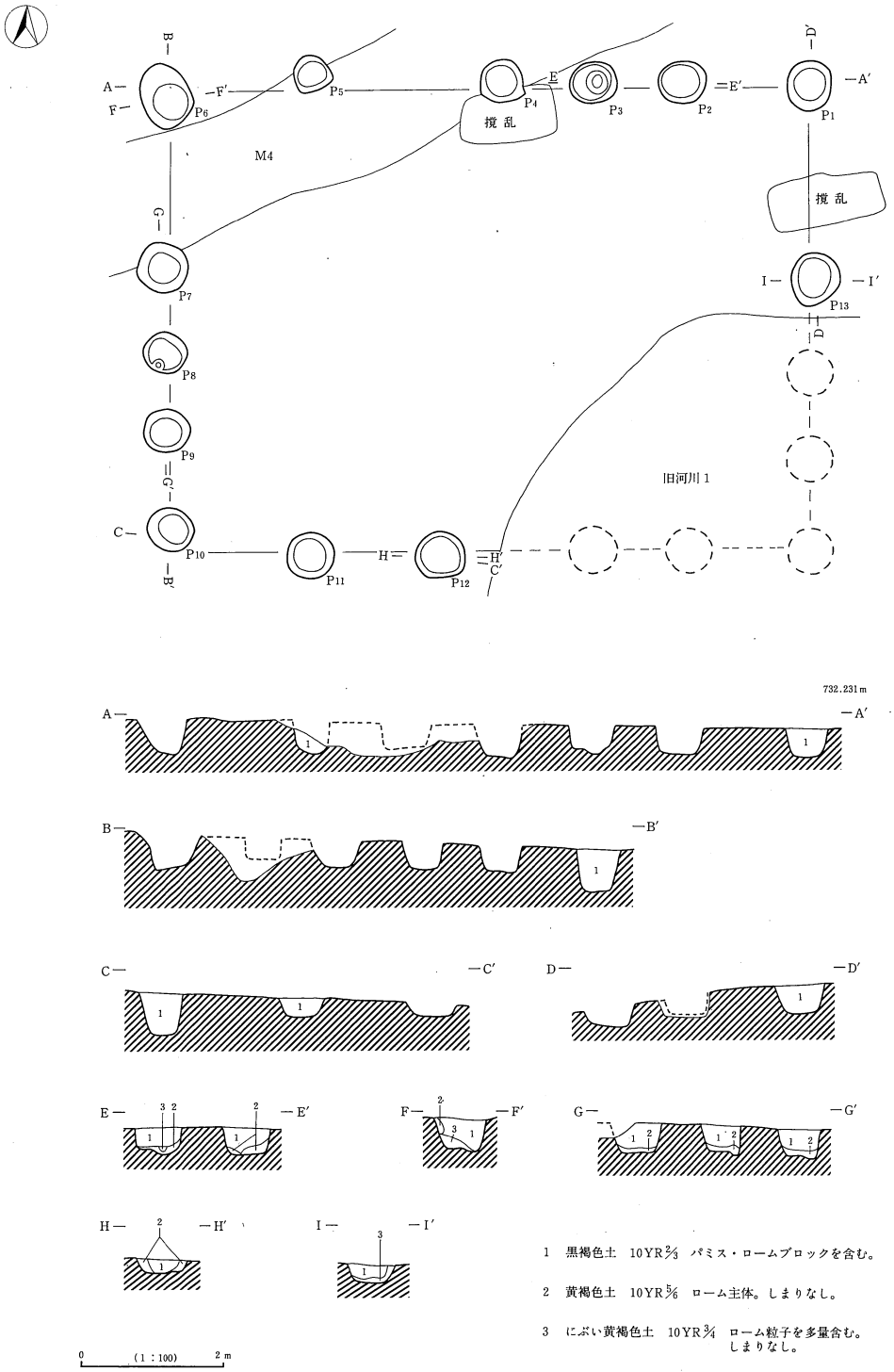
第25図　Ｆ４号掘立柱建物址実測図

2)　Ｆ５号掘立柱建物址（第26図）

本址は、調査区の中央北側付近い・う－６・７グリッド内に位置する。全体層序（第８図）第Ⅲ層上面において検出された。北西隅はＭ４溝状遺構に破壊され、南東隅は旧河川１に破壊される。

平面形態は、東西に長い長方形を呈する側柱式の建物址である。規模は北側に配される東西間の間数が６間900㎝、南北５間600㎝を測る（第26図Ａ－Ａ′断面図）。柱間寸法は、桁行が130～200㎝、梁間が102～150㎝を測る。柱穴の平面形態は円形を基調とし、規模は径55～95㎝、深さは38～49㎝を測る。

本址の所産期は、出土遺物などがなく確定はできないが、第４図に示した「南上中原・南下中原遺跡」において、本址の北西隅を破壊するＭ４溝状遺構（平安時代以後）が、第１号竪穴遺構（12Ｃ前半）、旧河川１（古墳時代後期～平安時代）を切っている。これらの重複関係から、本址の時期は、平安時代以前といい得るのみである。



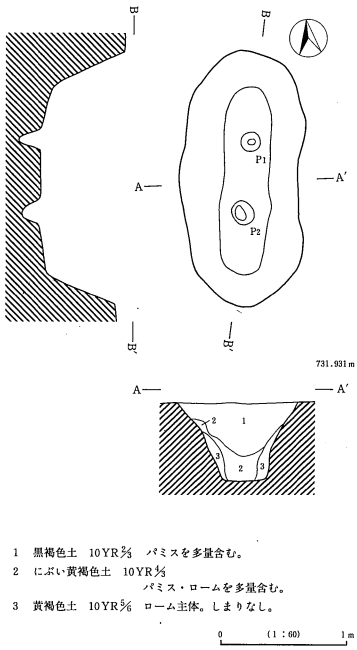
第26図　Ｆ５号掘立柱建物址実測図

第３節　土坑

1)　Ｄ17号土坑（第27図、図版六）

Ｄ17号土坑は、調査区の北側中央部付近え－10グリッド内に位置する。平面形態は、上端が204×93cmの楕円形を呈し、下端が150×36cmの隅丸長方形に近い楕円形を呈する。断面形状は、長軸の底部が共に上端に向って緩やかに開く在り方を示すのに対し、短軸の底部はやや垂直気味に30cm程立ち上り、上端に向って「朝顔形」に開く。底部面の形状は、長軸方向において底部面の中央に向い、緩やかな傾斜でくぼむ傾向を示している。一方、短軸方向の底部面は平坦を呈している。また、底面には２個のピットが検出され、径18～20cm、深さは12～18cmを測る。

以上の形態的特徴から、本土坑は縄文時代に属する陥し穴と考えられる。因に、隣接する上聖端遺跡、聖原遺跡においても陥し穴が検出されている。



第27図　Ｄ17号土坑実測図

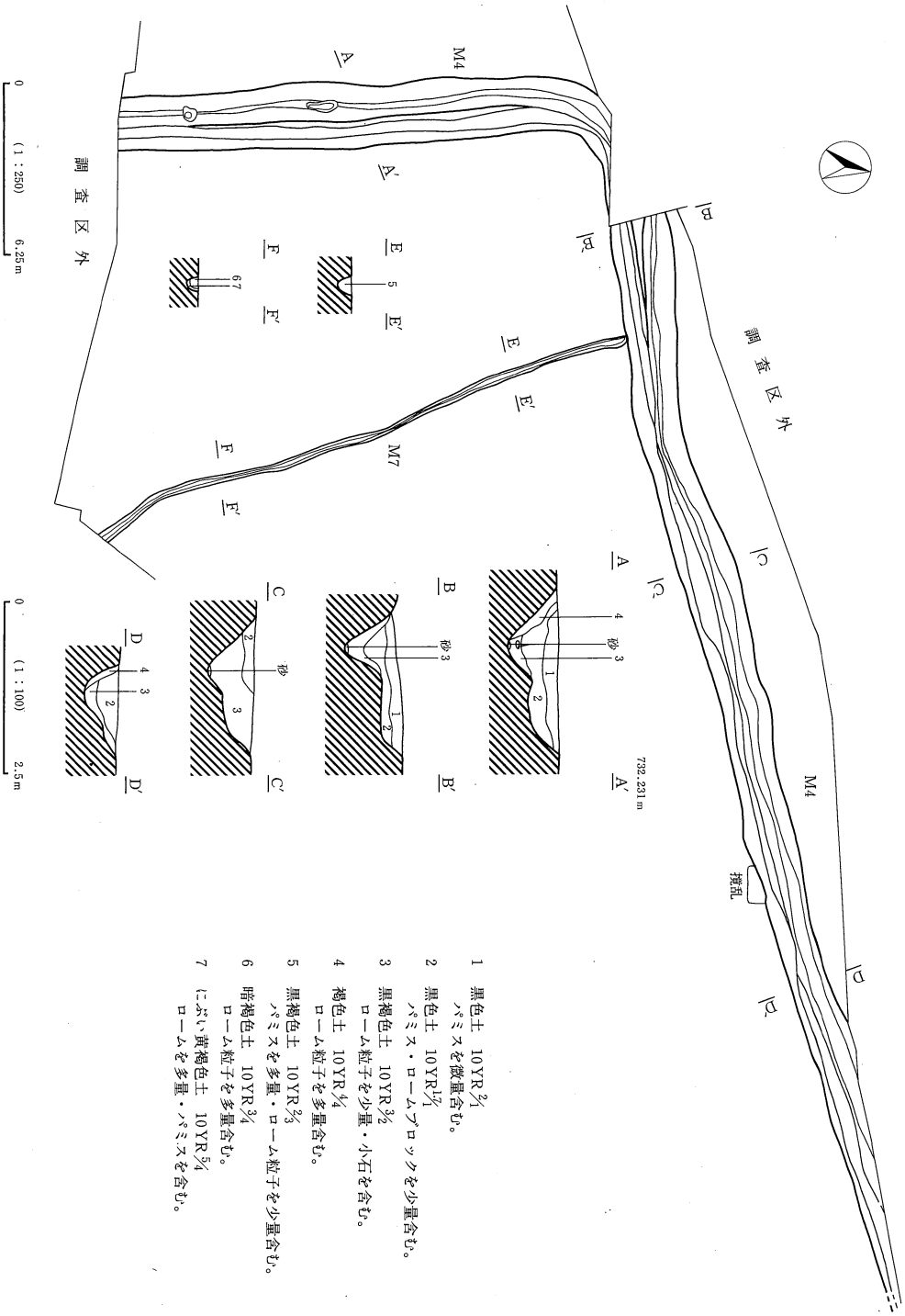
第４節　溝状遺構・旧河川

1)　Ｍ４・Ｍ７溝状遺構（第28図・29図、図版七・十一）

Ｍ４溝状遺構は、調査区西側のグリッド13内を南北に縦断し、更に、え－13グリッドの地点で「Ｌ字状」に屈曲し、調査区の北側を南北に横断する溝である。本址は「南上中原・南下中原遺跡」で検出されたＭ４溝状遺構が、調査区外となり北側に続く溝である。検出長は57.5ｍでＨ13号住居址（古墳時代末～奈良時代初期）、Ｆ５号掘立柱建物址（平安時代以前）、Ｍ５号溝状遺構（平安時代以前）を破壊している。深さは50～80cm前後を測る。覆土は４層に大別され、第３層の最下層には砂が堆積する。また、底面は凹凸が激しく本遺構は流路と考えられる。

本址からは土師器、須恵器、灰釉陶器などが出土し、その内の６点（第29図）が図示できた。なお、南上中原・南下中原遺跡の本遺構からは、土師質土器なども出土している。

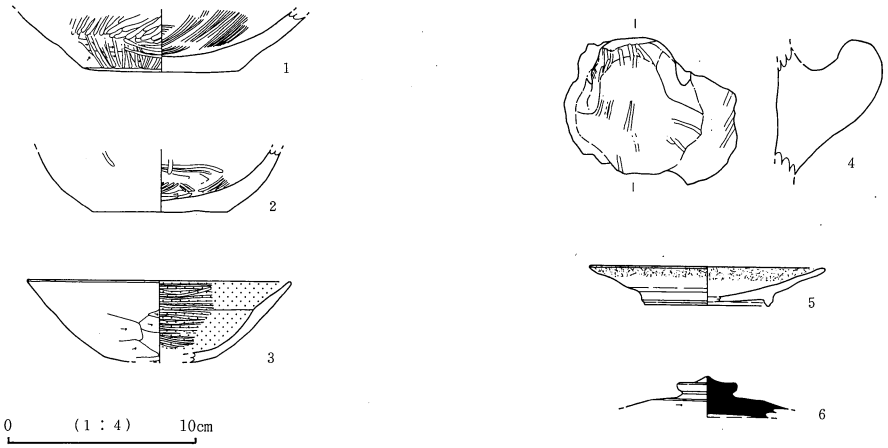
本遺構からの出土遺物は、古墳時代後期から平安時代まで多岐にわたっているため、時期決定は困難であり、重複関係から平安時代以後といい得るのみである。



第28図　Ｍ４・Ｍ７溝状遺構実測図

Ｍ７溝状遺構は、調査区の中央西寄りＨ13号住居址、Ｈ14号住居址の間を南北に縦断し、Ｍ４溝状遺構（平安時代以後）、旧河川１（古墳時代後期～平安時代）に切られる。深さは30～50㎝を測り、幅20～30㎝前後を測る。出土遺物は皆無であった。

本遺構の時期は、前述した遺構等の重複関係からおおむね平安時代以前と想定される。



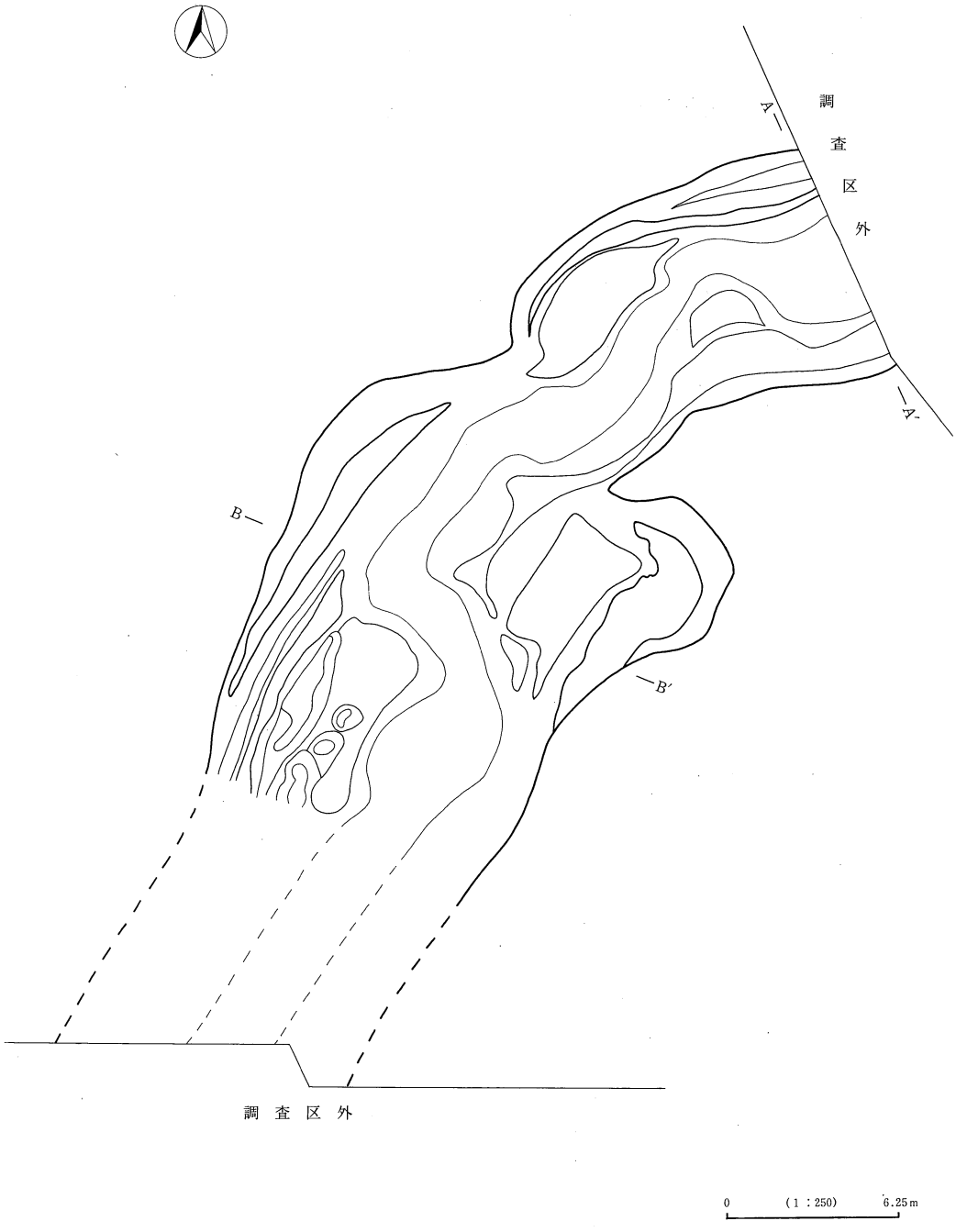
第29図　Ｍ４溝状遺構出土土器実測図

2)　旧河川１（第30図～33図、図版七・八・十一・十二）

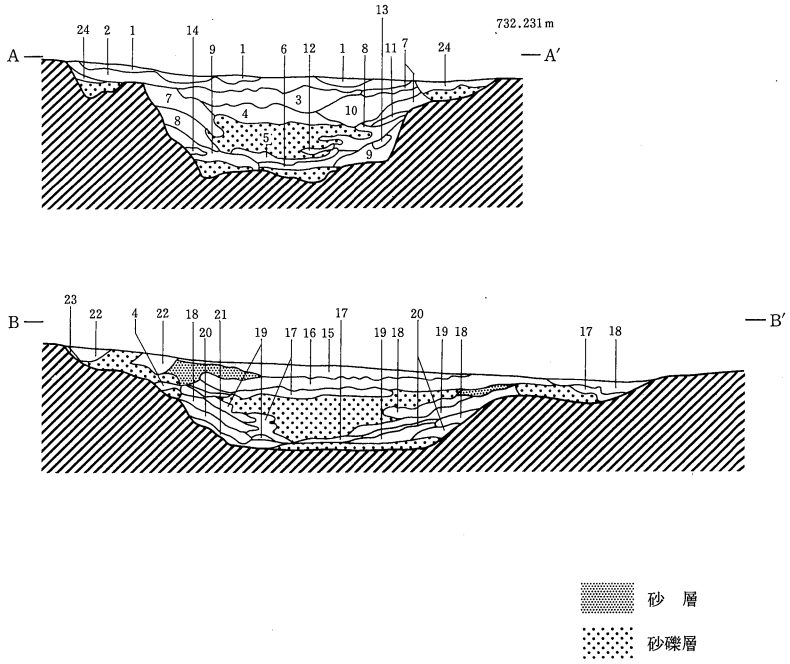
今回の調査で検出された本遺構は、「南上中原・南下中原遺跡」で確認された旧河川１が調査区域外となり、その北側に続く部分である。本址は調査区の東側を南東方向に縦断し、東端は調査区域外となり、更に東側に継続していることが考えられる。他遺構との重複関係は、Ｈ８号住居址・Ｆ５号掘立柱建物址の南東隅、及び、Ｍ７溝状遺構を破壊している。検出長は約37.5ｍで、深さは1.8～2.1ｍ、幅６～15ｍを測る河川である。底面は凹凸が激しく東から西に向ってレベルを低下させている。第31図に示した土層断面により、数回に亘る水の流れが想定される。

本址からは土師器・須恵器が多く出土した他、灰釉陶器・縄文時代の鉢片などもある。その内図示し得た主な土器・石製品は第32・33図に示した32点である。

これら、旧河川１から出土した土器は、縄文時代の堀の内式土器を含め、古墳時代後期から平安時代の様相を示す土器が多く出土しており、本址の明確な時期は確定できない。しかし、平安時代以前と考えられるＦ５号堀立柱建物址を本址が切り、南上中原・南下中原遺跡では、平安時代後葉と考えられる第７号住居址に切られている（第４図）。これらのことから本遺構が流路として機能していた時期は、平安時代の後葉以前であったことが想定されるのみである。



第30図　旧河川１実測図



1　黒色土　10YR2/1　パミス・小礫を含む。

2　黒褐色土　10YR2/3　パミスを少量含む。小礫・砂がブロック状に混入。

3　褐色土　10YR4/6　小礫・砂を多量含む。

4　にぶい黄褐色土　10YR4/3　小礫・砂を多量含む。

5　黒褐色土　10YR2/2　きめ細かな砂を少量含む。

6　黒褐色土　10YR3/2　ロームブロックを少量含む。

7　黒色土　10YR2/1　パミスを少量含む。

8　褐色土　10YR4/4　パミスを少量含む。

9　にぶい黄褐色土　10YR5/4　礫を少量含む。ロームブロック多量混入。

10　暗褐色土　10YR3/4　砂礫少量混入。

11　明黄褐色土　10YR6/6　パミス・ローム粒子を多量含む。

12　灰黄褐色土　10YR4/2　ロームブロックを多量含む。

13　黒色土　10YR1.7/1　小礫を少量含む。

14　褐色土　10YR4/4　ローム粒子を多量含む。

15　黒褐色土　10YR2/2　小石が少量混入。

16　黒褐色土　10YR3/1　パミス・ローム粒子を微量含む。

17　暗褐色土　10YR3/4　砂質のシルト・小石混入。

18　黒色土　10YR2/1　パミスを含む。黄色の砂が多量混入。

19　黒色土　10YR1.7/1　パミス・ロームブロックを含む。

20　褐色土　10YR4/6　パミス・ローム粒子を多量含む。

21　灰黄褐色土　10YR4/2　白・黒のシルト。

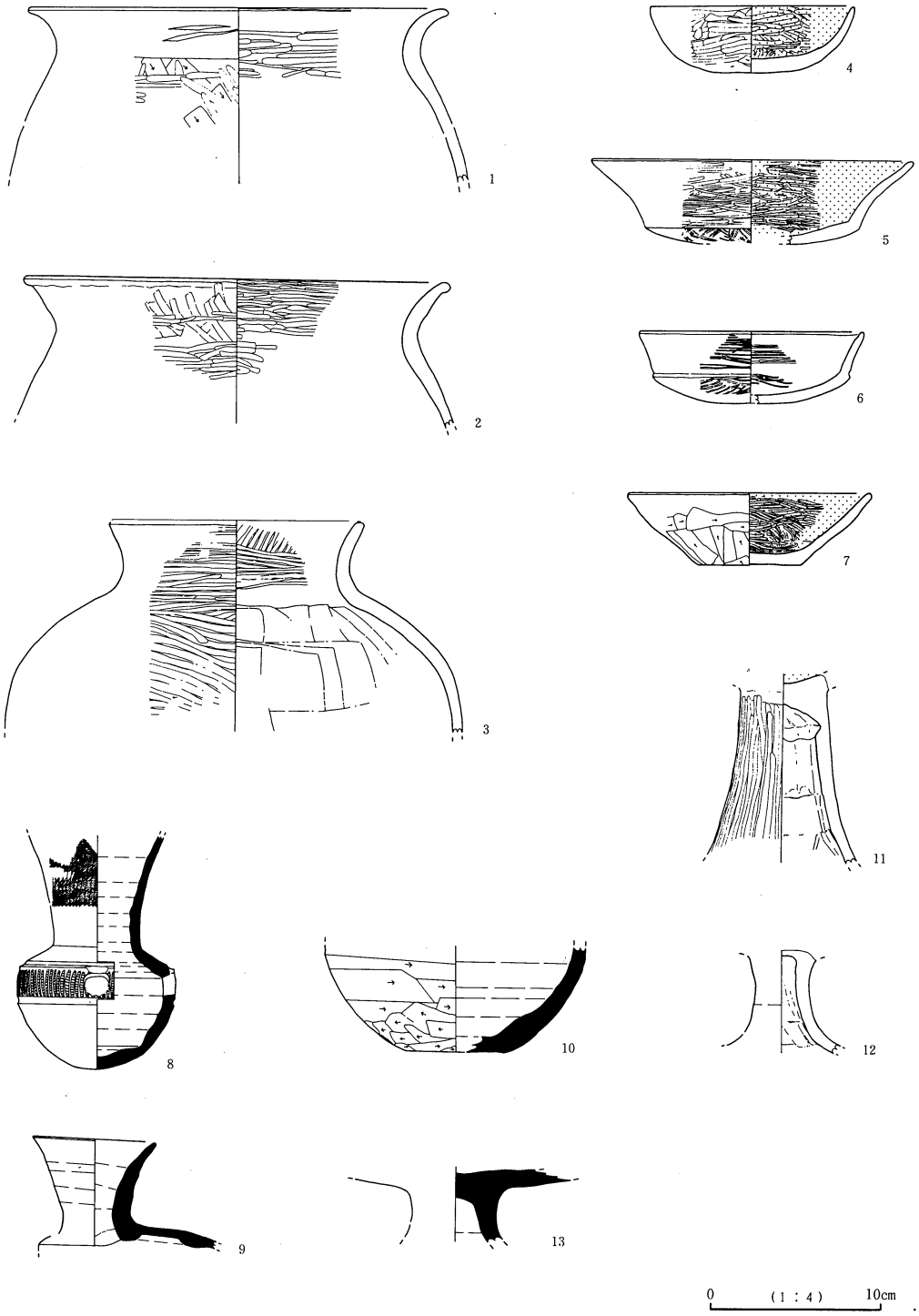
22　黒色土　10YR2/1　小石が少量混入。

23　褐色土　10YR4/6　ローム粒子を多量含む。

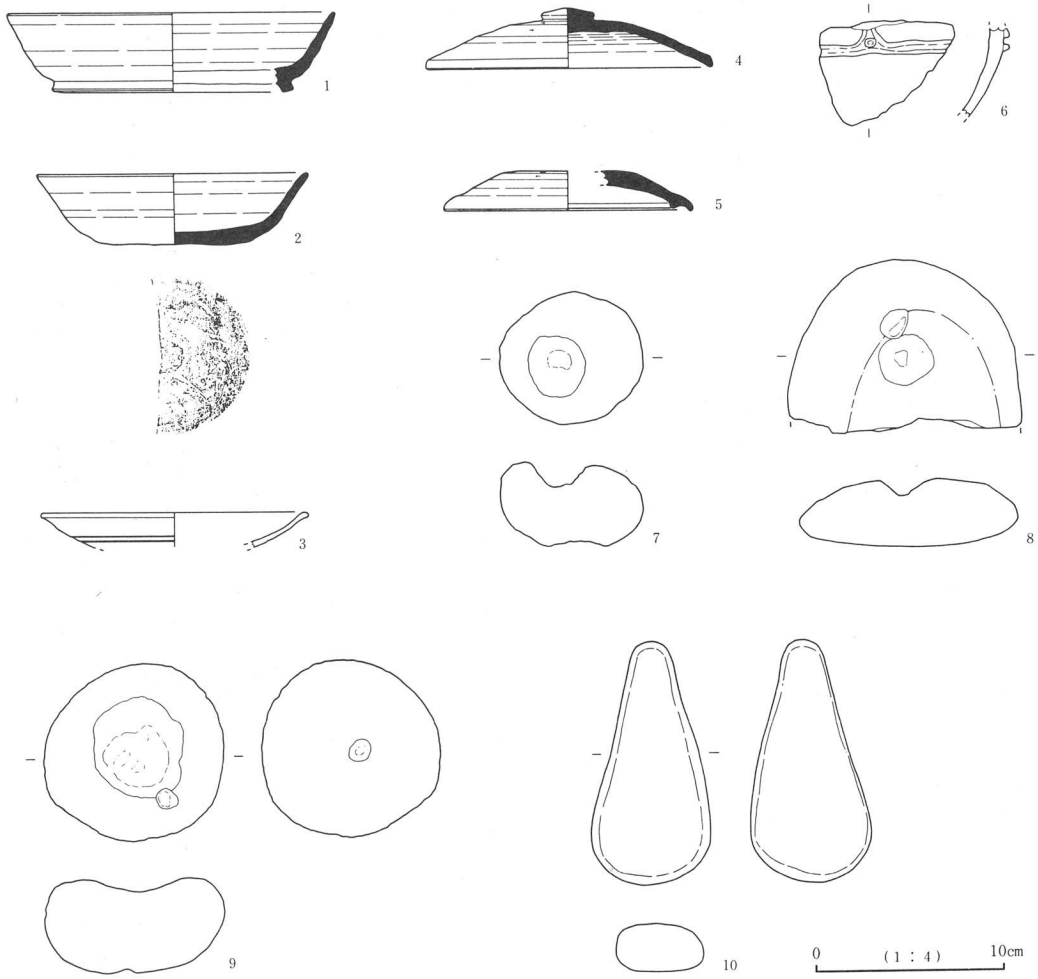
24　黒褐色土　10YR3/1　パミス・小礫を少量含む。

0　(1：150)　3.75m

第31図　旧河川１土層断面図



第32図　旧河川１出土土器実測図

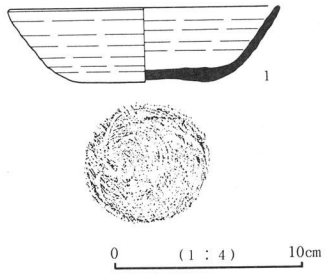


第33図　旧河川１出土土器実測図

第５節　グリッド・表採遺物（第34図、図版十二）

グリッド出土、及び、表採遺物には土師器・須恵器が出土しているがいずれも小片であり図示し得なかった。土師器には、坏・甕などの破片が多く、須恵器には高台付坏・甕・坏がある。これらの土器はおおむね古墳時代後期から平安時代の様相を示す破片が多い。

これらの内で、図示し得たものは第34図に示した奈良時代後半から平安時代前半にかけての須恵器坏であった。



第34図　表採土器実測図

坏の底部は、回転糸切り後、外周は手持ちヘラケズリが行なわれている。

第３表　南下中原遺跡Ⅱ出土土器観察表

Ｈ８号住居址

挿図番号	器種	法量	残存	成形	調整	色調	備考
11-1	土師器甕	(18.2) － 〈9.8〉	口縁1/3	非ロクロ	外)胴部ナデ後 口縁ヨコナデ 内)口縁ヨコナデ後胴部ヘラナデ	外)7.5YR8/3･5/3 内)7.5YR7/3･4/2 断)7.5YR7/4	
11-2	土師器甕	－ (6.4) 〈4.4〉	底部1/2	非ロクロ	外)ナデ(成形)後ヘラミガキ 内)ヘラナデ後 一部ナデ	外)7.5YR7/4 内)7.5YR5/3 断)7.5YR7/3	外面に付着物多い
11-3	土師器坏	(14.0) (5.6) 4.7	口縁2/3 底部1/2	非ロクロ	外)ナデ後口縁ヨコナデ後体部ヘラケズリ 内)ヘラミガキ後黒色処理	外)5YR5/4 内)黒色 断)5YR5/4	
11-4	土師器坏	－ (7.2) 〈2.5〉	底部1/2	ロクロ	外)底部切り離し後ヘラケズリ後ナデ 内)ヘラケズリ後黒色処理	外)5YR7/4 内)黒色 断)5YR7/4	
	土師器甕	－ 〈12.9〉 －	破片	非ロクロ	外)口辺部横位のヘラミガキ胴部縦位のヘラミガキ剝離･摩滅著しい 内)口辺部横位のヘラミガキ胴部ナデの後粗いヘラミガキ	外)10YR7/3 内)　〃 断)　〃	昭和63年度調査

Ｈ12号住居址

14-1	土師器坏	(13.8) (10.6) 〈3.5〉	口縁1/12 底部1/6	非ロクロ	外)底部ナデ後ヘラケズリ･口縁ヨコナデ(刷毛状工具使用) 内)みこみ部ナデ後口縁ヨコナデ	外)5YR7/4 内)5YR7/4 断)2.5YR7/3	
14-2	土師器坏	(15.2) － 〈2.8〉	口縁1/8	非ロクロ	外)ナデ後 口縁ヨコナデ 内)ナデ後 口縁ヨコナデ	外)7.5YR7/3 内)10YR7/3 断)　〃	
14-3	土師器甕	－ (4.0) 〈1.6〉	底部2/3	非ロクロ	外)ナデ 内)ヘラナデ	外)7.5YR6/4 内)　〃 断)10YR6/4	

Ｈ13号住居址

18-1	土師器甕	(23.0) － 〈18.9〉	口縁3/4	非ロクロ	外)口縁ヨコナデ後胴部ヘラケズリ 内)口縁ヨコナデ後胴部ヘラナデ	外)5YR7/4 内)5YR5/3 断)5YR7/4	
18-2	土師器甕	22.0 － 〈18.2〉	口縁7/8	非ロクロ	外)胴部刷毛目後口縁ヨコナデ 内)胴部刷毛目後口縁ヨコナデ	外)5YR7/4 内)5YR6/3 断)5YR7/4	
19-1	土師器甕	(23.8) － 〈8.5〉	口縁1/3	非ロクロ	外)口縁ヨコナデ後胴部ヘラケズリ 内)口縁ヨコナデ(刷毛状工具使用)後胴部ヘラナデ	外)7.5YR7/4 内)7.5YR7/3 断)　〃	
19-2	土師器甕	(22.2) － 〈7.1〉	口縁1/4	非ロクロ	外)口縁ヨコナデ(刷毛状工具使用)後胴部ヘラケズリ後部分的にナデ 内)口縁ヨコナデ後(刷毛状工具使用)後胴部刷毛目	外)7.5YR8/4 内)7.5YR8/3 断)7.5YR8/3	
19-3	土師器甕	－ (4.9) 〈12.9〉	底部3/4	非ロクロ	外)ヘラケズリ 内)ヘラナデ	外)5YR6/3 内)5YR4/4 断)2.5YR6/6	
19-4	土師器甕	－ 6.0 〈13.6〉	底部完形	非ロクロ	外)ヘラケズリ 内)ヘラナデ	外)5YR5/3 内)5YR2/3 断)5YR7/4	
19-5	土師器坏	13.8 － 5.2	口縁3/4 底部完形	非ロクロ	外)ナデ･オサエ→体部ヘラケズリ･口縁ヨコナデ 内)みこみ部ナデ(一部刷毛状工具使用)･口縁ヨコナデ	外)7.5YR7/4 内)　〃 断)7.5YR8/4	
19-6	土師器坏	11.8 － 3.7	口縁3/4 底部完形	非ロクロ	外)口縁ヨコナデ後ヘラケズリ 内)みこみ部ナデ後口縁ヨコナデ	外)5YR7/4 内)　〃 断)　〃	
19-7	土師器坏	11.0 － 3.0	口～底3/4	非ロクロ	外)ナデ→体部ヘラケズリ･口縁ヨコナデ 内)みこみ部ナデ後口縁ヨコナデ	外)5YR6/6 内)5YR6/4 断)2.5YR7/4	

挿図番号	器種	法量	残存	成形	調整	色調	備考
19-8	土師器 坏	(13.2) (9.5) 3.4	口縁1/12 底部1/3	非ロクロ	外)口縁ヨコナデ(刷毛状工具使用)後底部ヘラケズリ 内)みこみ部ナデ後口縁ヨコナデ	外)7.5YR6/6 内)7.5YR5/6 断)5YR7/4	
19-9	須恵器 坏	(17.0) (9.8) 5.1	口縁1/3 底部1/2	ロクロ	外)底部回転ヘラケズリ後ナデ	外)10Y8/1 内)7.5Y7/1 断)7.5Y8/1	
19-10	須恵器 坏	(13.8) (8.0) 3.9	口縁1/4 底部1/3	ロクロ	外)回転ヘラ切り後手持ちヘラケズリ	外)5Y7/2 内)〃 断)〃	
19-11	須恵器 坏	(15.4) (11.4) 3.7	口縁一部 底部1/3	ロクロ	外)底部切り離し→高台貼付	外)N6/0 内)N7/0 断)N6/0	
19-12	須恵器 坏	(18.4) (12.6) 4.0	口縁1/10 底部1/6	ロクロ	外)底部切り離し→高台貼付	外)N7/0 内)N7/0 断)7.5Y7/1	
20-1	須恵器 蓋	(12.6) 5.2 2.5	口縁1/2 つまみ完形	ロクロ	外)天井部回転ヘラケズリ→つまみ貼付	外)N6/0 内)〃 断)〃	
20-2	須恵器 蓋	(14.8) — 〈2.0〉	口縁1/8	ロクロ		外)2.5YR5/1 内)2.5YR6/4 断)〃	還元不足
20-3	須恵器 蓋	(14.6) — 〈1.1〉	口縁1/6	ロクロ		外)N6/0 内)〃 断)〃	
20-4	須恵器 蓋	(17.4) — 〈1.0〉	口縁1/10	ロクロ	外)天井部回転ヘラケズリ	外)N6/0 内)〃 断)〃	
20-5	土師器 高坏	— — 〈8.2〉	脚柱部 完形	非ロクロ	外)ナデ後ヘラケズリ 内)(坏部)ヘラミガキ後黒色処理(脚部)ナデ後ヘラケズリ	外)10YR8/3 内)〃 断)〃	
20-6	土師器 高坏	— — 〈6.7〉	脚柱部 ほぼ完形	非ロクロ	外)脚裾部ヨコナデ(刷毛状工具使用)後脚柱部ヘラケズリ 内)(坏部)ヘラミガキ後黒色処理(脚部)脚裾部ヨコナデ後脚柱部ヘラナデ	外)7.5YR8/3 内)10YR7/2 断)7.5YR8/3	

H14号住居址

24-1	土師器 坏	(15.6) — 5.7	口縁1/3 底部完形	非ロクロ	外)体部ヘラミガキ・口縁ヨコナデ 内)ヘラミガキ後黒色処理	外)7.5YR7/2 内)黒色 断)10YR6/4	
24-2	土師器 坏	(11.5) — 6.0	口縁1/4	非ロクロ	外)ヘラミガキ 内)ヘラミガキ後黒色処理	外)7.5YR7/3 内)黒色 断)10YR4/1	
24-3	土師器 甕	— 6.1 〈4.1〉	底部完形	非ロクロ	外)胴部ナデ後底部・底部外周ヘラケズリ 内)ヘラナデ	外)2.5YR6/4 内)10YR8/2 6/1 断)2.5YR6/6	
24-4	土師器 甕	— (8.0) 〈3.8〉	底部1/3	非ロクロ	外)ナデ・ヘラケズリ後胴部ヘラミガキ 内)ヘラナデ・ナデ	外)2.5YR5/6.7.5YR7/6 内)2.5YR6/6 断)5YR7/4	
24-5	土師器 甕	— —	破片 (外耳)	非ロクロ	外)ヘラケズリ後ヘラミガキ 内)ヘラナデ	外)7.5YR6/4 内)7.5YR6/6 断)7.5YR7/4	

M4号溝状遺構

29-1	土師器 甕	— (8.2) 〈3.3〉	底部1/4	非ロクロ	外)ヘラケズリ後ヘラミガキ 内)刷毛目	外)7.5YR3/3 内)10YR4/1 断)7.5YR3/3	
29-2	土師器 甕	— (7.2) 〈3.3〉	底部1/4	非ロクロ	外)ナデ後ヘラミガキ 内)ヘラナデ・ヘラケズリ後ヘラミガキ	外)2.5YR6/6 内)7.5YR6/4 断)7.5YR6/6	

挿図番号	器種	法量	残存	成形	調整	色調	備考
29-3	土師器 坏	(14.0) (5.8) 〈4.3〉	口縁1/6	非ロクロ	外)ナデ後ヘラケズリ 内)ヘラミガキ後黒色処理	外)7.5YR5/1.5YR5/6 内)黒色 断)7.5YR6/3	
29-4	土師器 甕	— — 7.0	把手のみ残存	非ロクロ	外)ナデ後ヘラミガキ 内)ヘラミガキ	外)10YR7/3 内)7.5YR7/4 断)10YR7/3	
29-5	灰釉陶器 皿	(12.4) (7.0) 2.0	口縁1/4 底部1/2	ロクロ	外)底部切り離し後回転ヘラケズリ→高台貼付	外)10Y7/1 内)10Y7/1 断)N8/0	釉付着
29-6	須恵器 蓋	— (3.2) 〈2.2〉	つまみ1/3	ロクロ	外)天井部回転ヘラケズリ→つまみ貼付	外)2.5YR5/1 内)2.5Y6/4 断)　〃	

旧河川1

32-1	土師器 甕	(24.4) — 〈9.9〉	頸～胴部 1/6	非ロクロ	外)口～頸部ヨコナデ　胴部ヘラケズリの後ミガキ 内)ナデの後 口縁部・頸部にミガキ	外)10YR5/3 内)10YR6/2 断)10YR6/3	
32-2	土師器 甕	(24.8) — 〈8.4〉	口縁1/4	非ロクロ	外)口縁ヨコナデ・ヘラナデ後 口縁・胴部ヘラミガキ 内)胴部ナデ後口縁ヘラミガキ	外)7.5YR7/4 内)　〃 断)　〃	
32-3	土師器 壺	(14.8) — 〈12.3〉	胴部1/3	非ロクロ	外)ヘラミガキ 内)口縁ヘラミガキ 胴部ヘラナデ	外)10YR5/4 内)10YR5/3 断)10YR5/4	
32-4	土師器 坏	11.8 4.2 3.9	口縁1/3 底部完形	非ロクロ	外)ヘラケズリ→ヘラミガキ 内)ヨコナデ→ヘラミガキ→黒色処理	外)7.5YR6/4 内)黒色 断)10YR4/2	
32-5	土師器 坏	(18.6) (12.4) 4.9	底部1/4	非ロクロ	外)口縁～体部ヨコナデ→ヘラミガキ 底部ヘラケズリ→ヘラミガキ 内)口縁～底部ヨコナデ→ヘラミガキ→黒色処理	外)7.5YR6/4 内)黒色 断)7.5YR7/3	
32-6	土師器 坏	(13.0) (11.4) 4.2	底部1/4 口縁一部	非ロクロ	外)口縁～体部ヨコナデ 底部ヘラケズリ→ヘラミガキ 内)口縁ヨコナデ・みこみ部ナデ→ヘラミガキ	外)5YR7/4 内)7.5YR7/4 断)　〃	
32-7	土師器 坏	(14.1) (5.8) 4.2	口縁～ 底部1/4	非ロクロ	外)口縁ヨコナデ後体部・底部ヘラケズリ 内)ヘラミガキ後黒色処理	外)5YR7/4 内)黒色 断)7.5YR6/2	
32-8	須恵器 瓶	— — 〈13.6〉	肩部～ 底部4/5	ロクロ 注口穿孔	外)頸部に波状文・体部に列点文を施した後体部に一条の沈線を施す	外)N5/0 内)5Y6/1 断)5Y8/2	
32-9	須恵器 平瓶	7.1 — 〈6.7〉	口縁完形	ロクロ		外)N4/0 内)N6/0 断)N4/0	
32-10	須恵器 長頸壺or 平瓶?	— (5.6) 〈6.1〉	底部2/3	ロクロ	外)底部回転糸切り後ナデ 胴部回転ヘラケズリ後底部周縁手持ちヘラケズリ	外)10YR6/1 内)10YR6/2 断)10YR7/3	
32-11	土師器 高坏	— — 〈11.0〉	脚柱部 完形	非ロクロ	外)ナデ後ヘラミガキ 内)ナデ(指およびヘラ)	外)2.5YR6/6 内)N3/0 断)2.5Y8/2	内面に焼成時の焼こみあり
32-12	土師器 高坏	— — 〈6.0〉	脚柱部 ほぼ完形	ロクロ	外)脚裾部ヨコナデ後脚柱部ナデ(指か?)	外)2.5Y8/2 内)5YR7/4 断)　〃	
32-13	土師器 高盤	— — 〈4.3〉	破　片	ロクロ		外)10Y6/1 内)　〃 断)5Y7/2	
33-1	須恵器 坏	(17.4) (12.8) 4.2	口縁1/6 底部一部	ロクロ	→底部切り離し後高台貼付	外)N7/0 内)　〃 断)　〃	

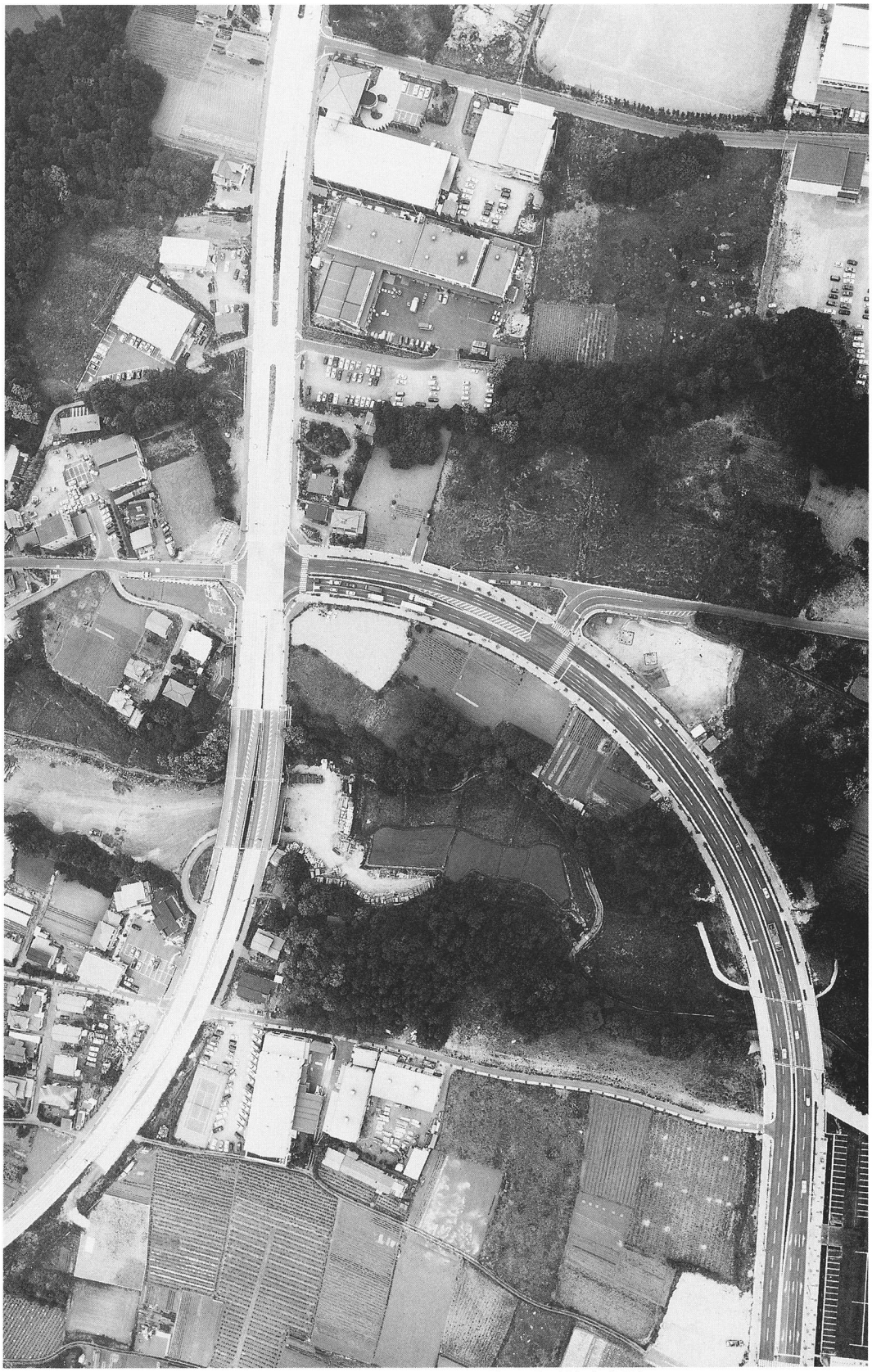
挿図番号	器種	法量	残存	成形	調整	色調	備考
33-2	須恵器 坏	(14.4) (8.2) 3.8	底部1/2 口縁一部	ロクロ	外)底部回転ヘラケズリ後一部ナデ	外)7.5Y7/1 内)7.5Y7/1 断)7.5YR7/3	
33-3	灰釉陶器 Ⅲ	(14.4) － 〈2．0〉	口縁1/8	ロクロ	外)体部に2条の沈線を施す	外)2.5Y7/1 内)7.5Y7/1 断)　〃	自然釉付着
33-4	須恵器 蓋	(15.2) (2.8) 3.2	口縁1/3 つまみ1/2	ロクロ	外)天井部 回転ヘラケズリ→つまみ貼付 内)天井部 刷毛状工具によるナデ	外)2.5GY7/1 内)　〃 断)　〃	天井部に自然釉付着
33-5	須恵器 蓋	(13.2) － 〈2．1〉	口縁1/6	ロクロ	外)天井部 回転ヘラケズリ	外)N8/0 内)N8/0 断)N8/0	
33-6	縄文 鉢	－ － 〈5．2〉	破片	非ロクロ	外) 隆帯貼付	外)5YR6/4 内)　〃 断)　〃	

表採・グリッド

34-1	須恵器 坏	14.4 6.7 4.0	完形	ロクロ	外)底部回転糸切り	外)10Y7/1 内)　〃 断)N7/0	火だすきあり

南下中原遺跡Ⅱ出土石器観察表

挿図番号	器種	石質	長さ	幅	厚さ	備考
11-5	紡錘車	滑石	4.2	4.1	2.05	
20-7	凹石	軽石	16.7	11.6	5.8	
33-7	凹石	軽石	7.0	7.1	4.5	
33-8	凹石	安山岩	〈9.2〉	12.3	3.6	
33-9	凹石	安山岩	9.4	9.5	5.0	
33-10	磨石	輝石 安岩山	12.8	6.4	2.6	



南下中原遺跡Ⅱ付近航空写真（朝日航洋株式会社）

図版二

1　Ｈ８号住居址（西方より）

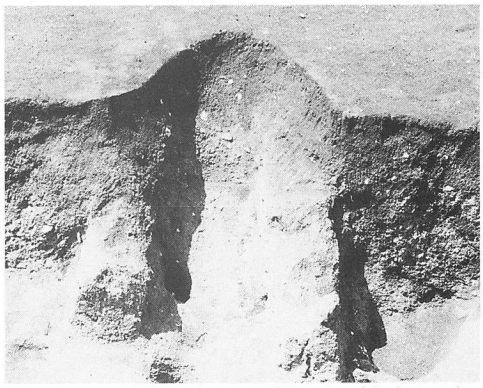
2　Ｈ８号住居址カマド（南方より）

3　Ｈ８号住居址カマド掘り方（南方より）

4　H12号住居址（南方より）

1　H12号住居址掘り方（南方より）

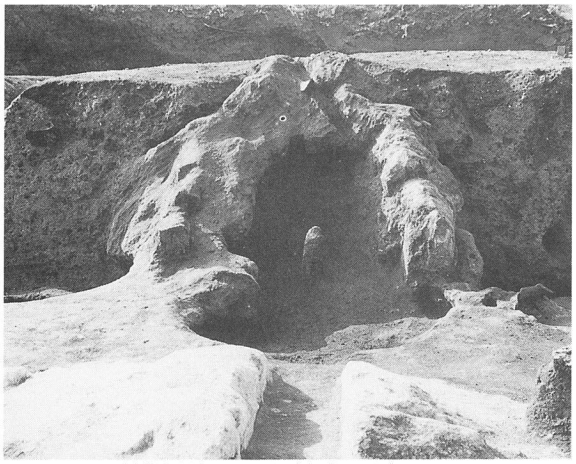
2　H12号住居址カマド（南方より）



3　H12号住居址カマド掘り方（南方より）

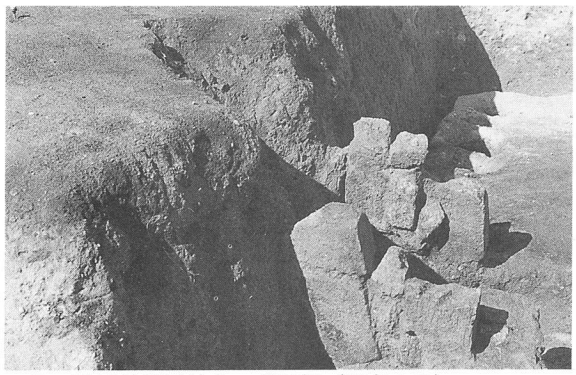
4　H13号住居址（南方より）

図版　四

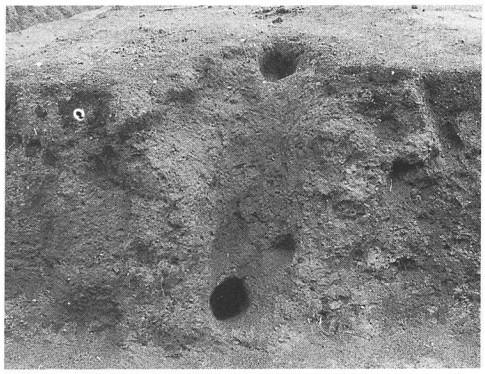


1　H13号住居址カマド（南方より）

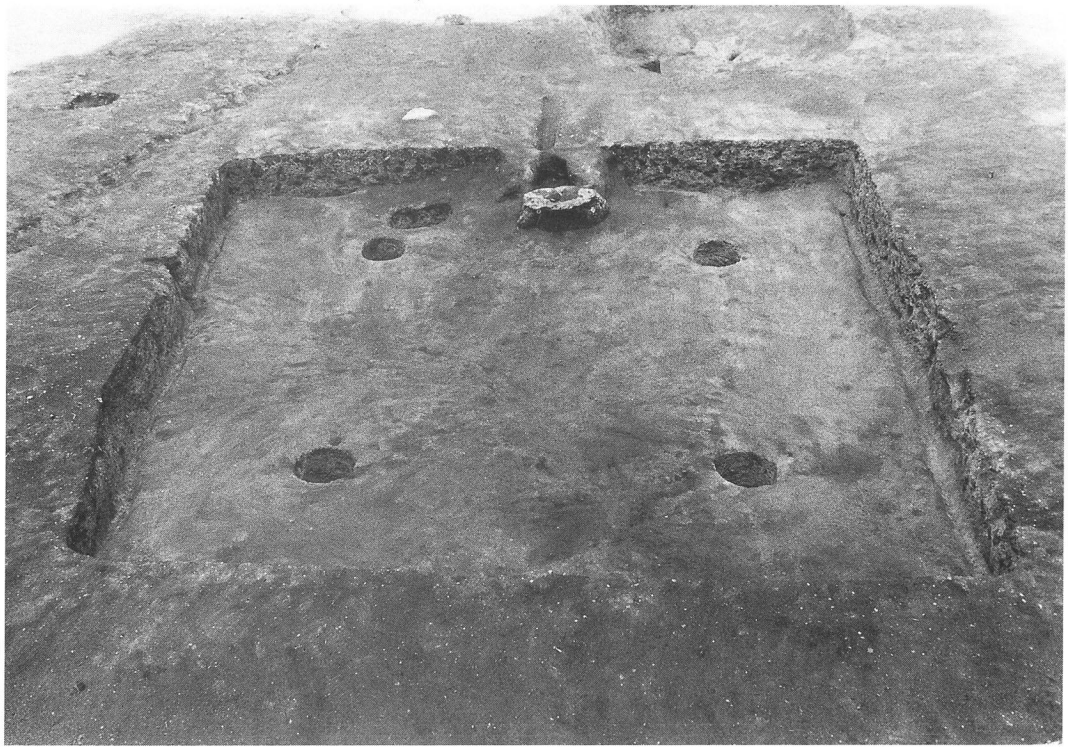
2　H13号住居址カマド石組（南方より）



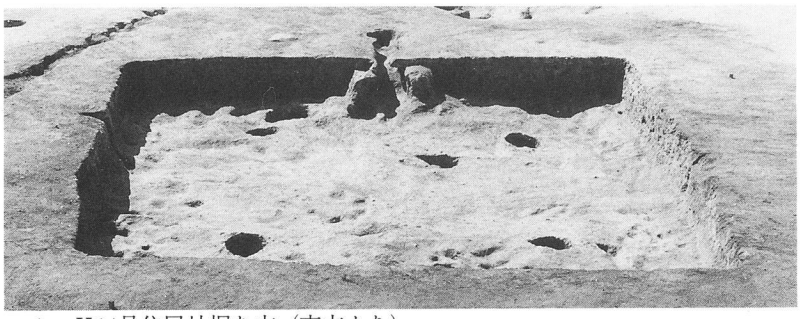
3　H13号住居址カマド石組（西方より）



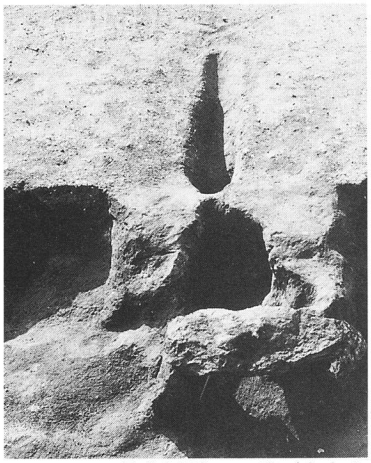
4　H13号住居址カマド掘り方（南方より）



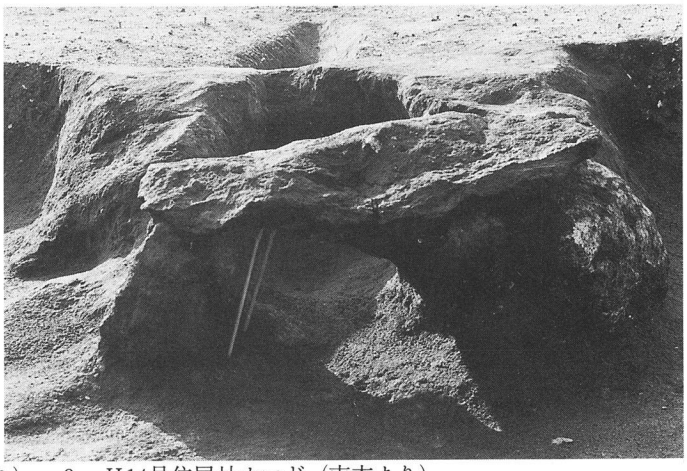
5　H14号住居址掘り方（南方より）



1　H14号住居址掘り方（南方より）



2　H14号住居址カマド（南方より）



3　H14号住居址カマド（南方より）

4　H14号住居址カマド（南方より）

5　H14号住居址カマド（南方より）

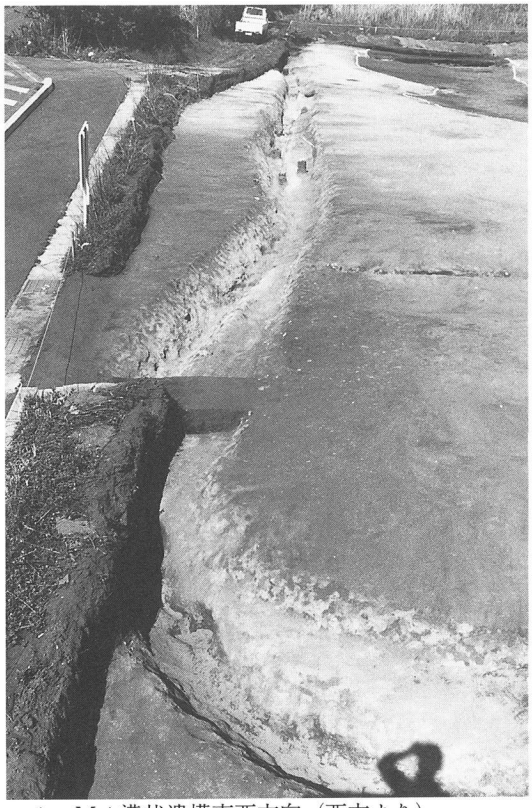
6　H14号住居址カマド（南方より）

7　H14号住居址カマド掘り方

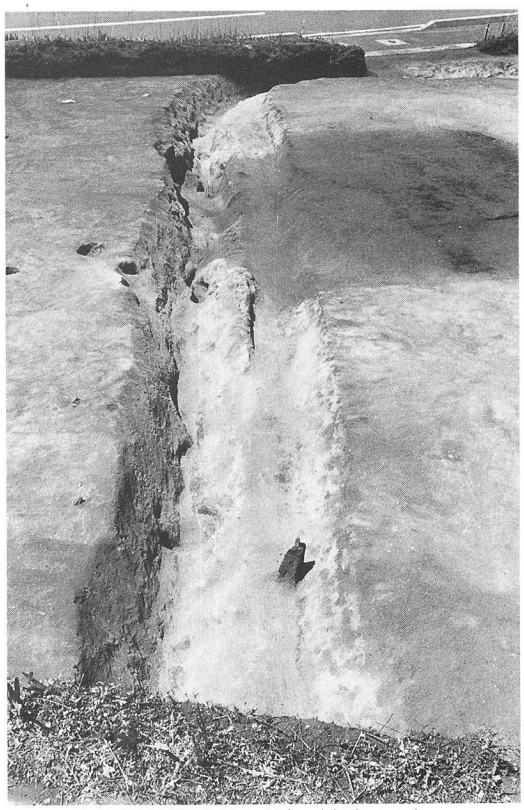
図版 六

1　Ｆ４号掘立柱建物址（東方より）

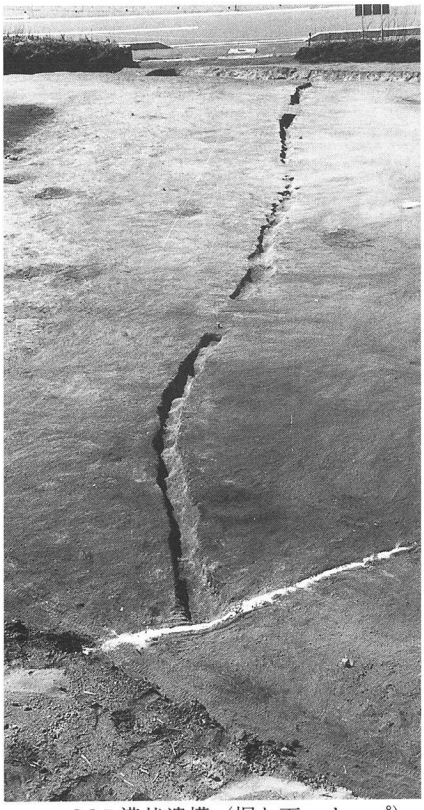
2　D17号土坑（北方より）



1　M４溝状遺構東西方向（西方より）

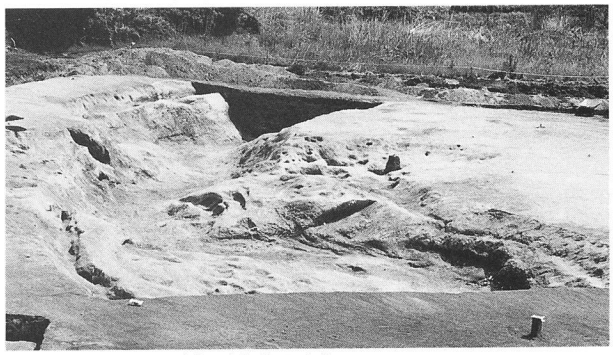


2　M４溝状遺構南北方向（南方より）



3　M７溝状遺構（掘り下スナップ）

4　旧河川１号（南西方向より）



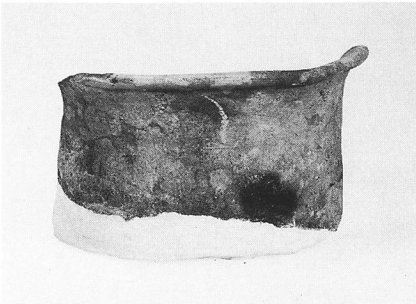
5　旧河川１（南西方向より）

図版　八

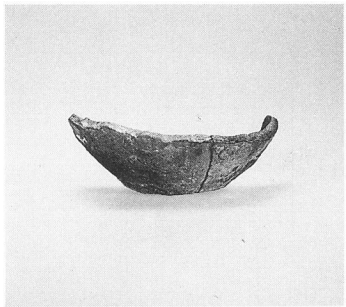
1　旧河川１（西方より）

旧河川１（南方より）

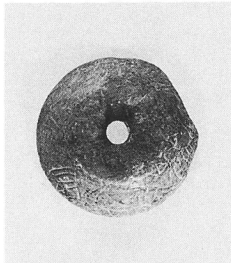
旧河川１　掘り下げ状況



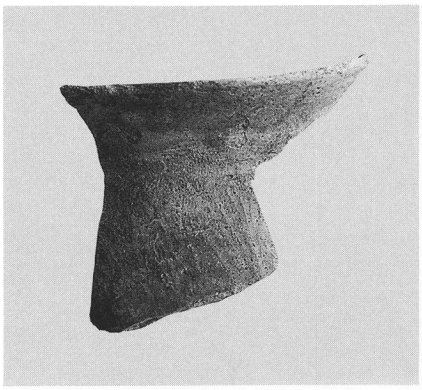
H-8 11-1



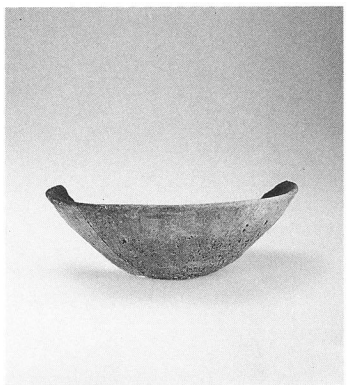
H-8 11-2



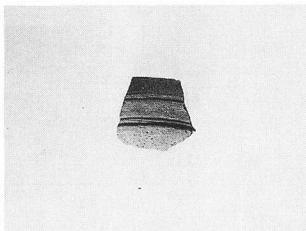
H-8 11-5



H-8 南上中原・南下中原遺跡出土(S63調)

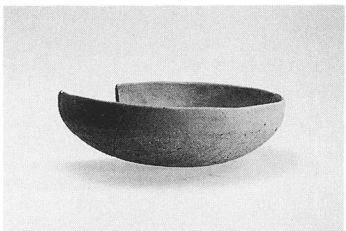


H-8 11-3

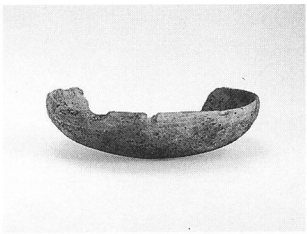


H-12 14-1

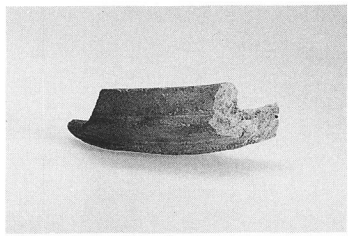
H-13 19-5



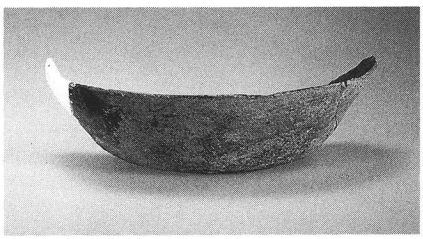
H-13 19-6



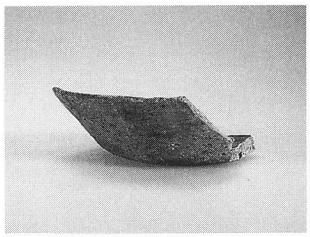
H-13 19-7



H-13 19-8



H-13 19-9



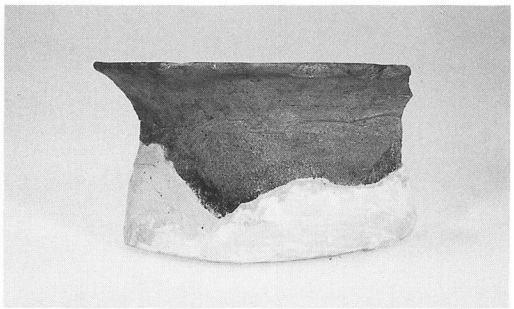
H-13 19-10

H-13 19-12

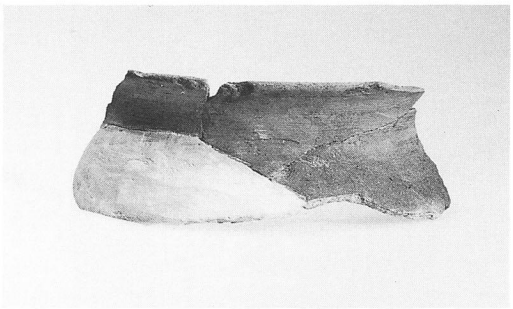
図版十

H-13　18-1

H-13　18-2



H-13　19-1



H-13　19-2

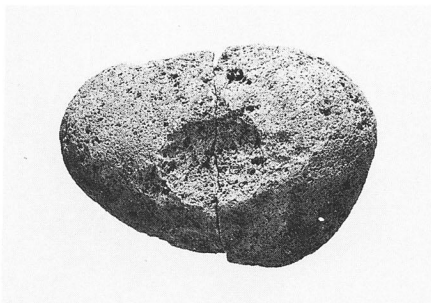
H-13　19-3

H-13　19-4

H-13　20-5

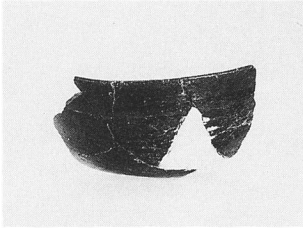
H-13　20-6

H-13　20-1



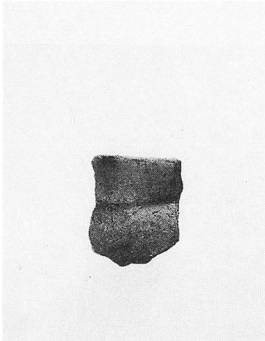
H-13　20-7

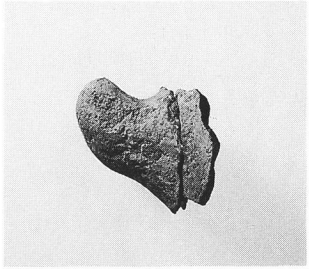
H-14　24-1

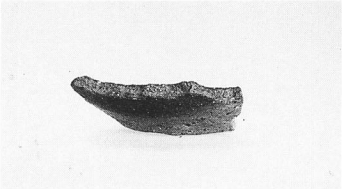

H-14　24-2

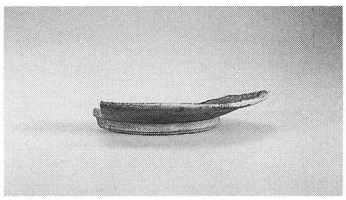
H-14　24-3

H-14　24-5

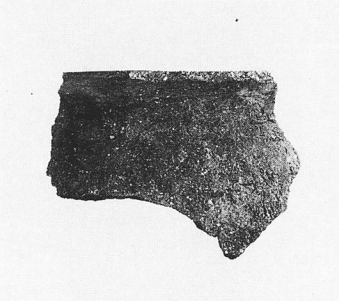

H-14

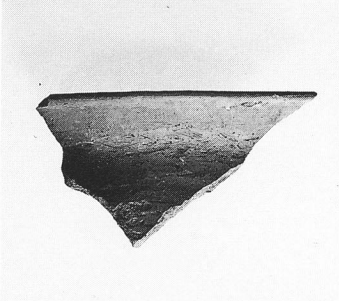

M-4　29-4


M-4　29-1

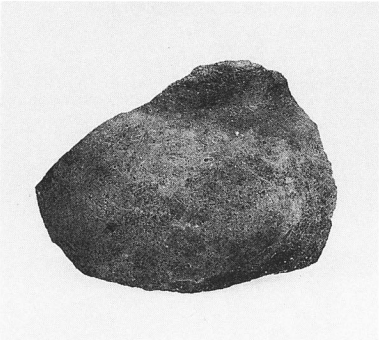

M-4　29-5

M-4　29-6

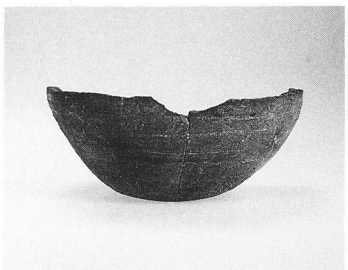

旧河川1　32-1


旧河川1　32-2

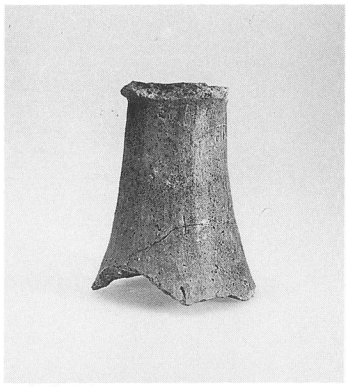
旧河川1　32-8

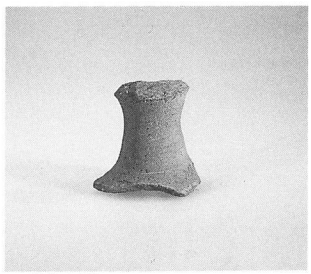

旧河川1　32-3

旧河川1　32-9


旧河川1　32-10

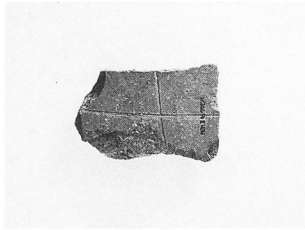
旧河川１　32-13

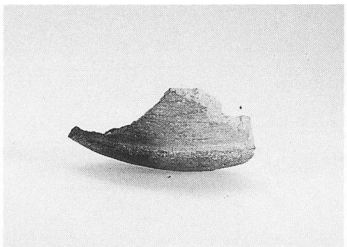

旧河川１　32-11

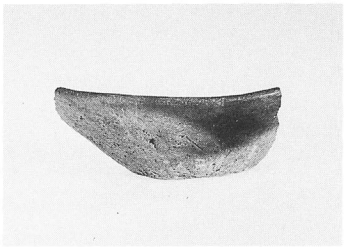

旧河川１　32-12

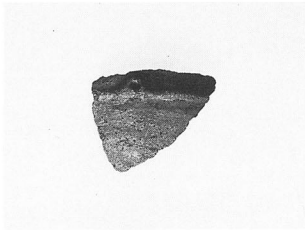
旧河川１　32-4

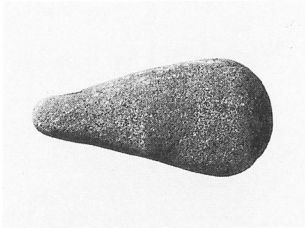
旧河川１　32-5

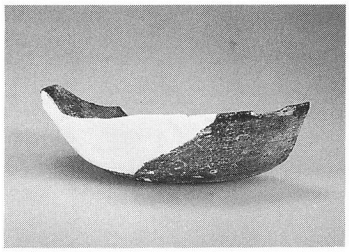

旧河川１


旧河川１　32-6

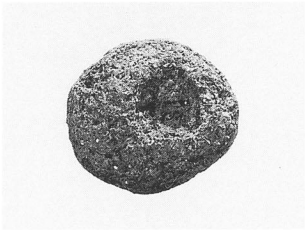

旧河川１　32-7

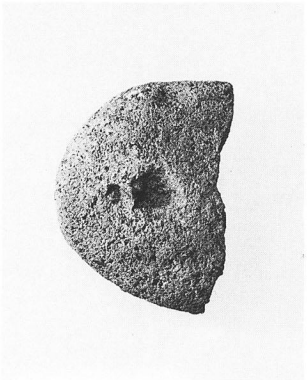

旧河川１　33-6

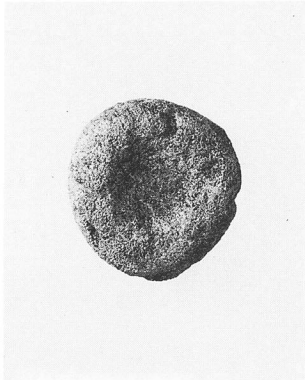

旧河川１　33-10


旧河川１　33-2

旧河川１　33-4


旧河川１　33-7


旧河川１　33-8


旧河川１　33-9

表採　34-1

佐久市埋蔵文化財調査報告書

第１集　『金井城跡』
第２集　『市内遺跡発掘調査報告書1990』
第３集　『石附窯址群Ⅲ』
第４集　『台大ふけ遺跡』
第５集　『立科Ｆ遺跡』
第６集　『上曽根遺跡』
第７集　『三貫畑遺跡』
第８集　『瀧の下遺跡』
第９集　『国道141号線関係遺跡』
第10集　『聖原遺跡Ⅱ』
第11集　『赤座垣外遺跡』
第12集　『若宮遺跡Ⅱ』
第13集　『上高山遺跡』
第14集　『栗毛坂遺跡』
第15集　『野馬久保遺跡』
第16集　『石並城跡』
第17集　『市内遺跡発掘調査報告書1991』（１月～３月）
第18集　『西曽根遺跡』
第19集　『上芝宮遺跡』
第20集　『下聖端遺跡Ⅲ』
第21集　『金井城跡Ⅱ』
第22集　『市内遺跡発掘調査報告書1991』
第23集　『南上中原・南下中原遺跡』
第24集　『上聖端遺跡』
第25集　『上久保田向Ⅳ』
第26集　『藤塚古墳群・藤塚Ⅱ』
第27集　『上久保田向遺跡Ⅳ』
第28集　『曽根新城遺跡Ⅴ
第29集　『山法師Ｂ・筒村Ａ・Ｂ遺跡』
第30集　『市内遺跡発掘調査報告書1992』
第31集　『山法師遺跡Ａ』
第32集　『東ノ割遺跡』
第33集　『聖原遺跡Ⅶ』
　　『下曽根遺跡Ⅰ』
　　『前藤部遺跡Ⅱ』
第34集　『西一本柳遺跡Ⅰ』
第35集　『市内遺跡発掘調査報告書』
第36集　『蛇塚ＢⅢ』
第37集　『西一本柳Ⅱ』

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第38集

芝宮遺跡群　南下中原遺跡Ⅱ

長野県佐久市長土呂南下中原遺跡Ⅱ発掘調査報告書

1995年３月

編集・発行　佐久市教育委員会

印　刷　所　㈱ＣＯＸ